渋谷おでんや物語

溝上雄文

舞ふ花に
夢は山河を
駈け廻る

平成十七年一月一日

滿上朋文

辞世の句

文楽鑑賞会で楽しそうに司会をする溝上氏。
下の写真は、人間国宝竹本住太夫氏（写真右）の話を聞く溝上氏。

節分のお化け（仮装行列）で光源氏に扮した溝上氏／円内の写真は実の娘のように可愛がった二代目司太夫／下の写真は、文楽劇場舞台裏での記念撮影

溝上氏のお姉さん（永森さん）と妹さん（本井さん）に挟まれて。

渋谷おでんや物語 3頁
其の一 3頁
其の二 35頁
其の三 65頁
追悼文／信じられない突然のおれ 野村さちこ 118頁

表紙装丁／仁井谷伴子

其の一

平成と年号が変わって数年、世間では年を追うごとに不況の波が押し寄せているのに、ここ渋谷の道玄坂は、何処からともなく湧き出てくるような、雑多で賑やかな人の波に洗われている。

私は、今年に入ってからずっと、仕事も私生活も不安定で、足枷を履いて深い海底に沈んでいくような、暗く苛ついた気持ちで過ごしていた。

そのせいで、ウキウキとして騒々しい人の流れを、ヘドロの底から舞い上がる腐った泥砂を透かして眺めるように、冷え切った覚めた目で見やり、ふと坂上に広がる雨空に目を向けた。

道玄坂の歩道では、ケヤキの枝葉が昼から降り出した雨にしっとりと濡れ、最後の力を振り絞るように、鮮やかな濃緑の葉を輝かせ、残り少ない今年の命を惜しんでいる。

記録的な猛暑が続いた夏も、やっとその勢いを失って、九月がもうすぐ終わろ

うとするここ数日間は、どんよりとした空模様が続いている。毎年毎年、季節が夏から秋に衣替えする頃の、お約束の儀式を執り行っているような気候である。

これからは降ったり晴れたりを繰り返しながら、やがて身も心も、いや時代さえも凍えさせる冬将軍に捉えられてしまうのだろう。

私は地下鉄半蔵門線の出口を兼ねた、道玄坂にある映画館ビルの裏出口で、暫く雨宿りをしていた。週末の賑やかな道玄坂を行き交う人々や、チケット売り場にたむろする若者たちの嬌声も、ここまでは届かない。

華やかな表りから路地一つ隔てただけで、戦後の影をまだ引きずるような古い店屋が並んでいる。だが、今はこのりには人影もほとんどない。

曲がりくねった路地の先に見える、井の頭線の古いくすんだ駅舎の壁が、ひとしきり強くなった白い糸雨のシャワーに洗われている。

右手に並んでいる古ぼけた店舗の裏側に当たる、モルタル建物の二階の窓がふいに少しだけ開いた。ふわーっ、ふわーっと流れる雨靄の中に、瑞々しい白牡丹

のような女の大きい顔が突き出て、そこだけが切り取られたようにくっきりと見えている。何となくこちらを見やっていたが、やっと私に気付いて小さく手を振っている。

「……」

何かを懸命に喋っているようだが、雨音に遮られてここまでは聞こえない。この女の人がこれから訪ねる、おでん屋［小花］の圭子ママである。

私は暫く待っていたが雨が止む気配もないので、小降りになったときを見計らい、細い路地をおでん屋の入り口まで小走りに駆け抜けた。

もう五時近くで、周りは暗くなりかけているが、入り口の脇に置かれた看板にはまだ灯が入っていない。二階に上がる階段の入り口に薄い茶色の暖簾が掛かり、紺で書かれた文字が［小花］と読める。

おでん屋のある路地にも人影はなく、風俗と怪しげなギャンブルの店舗の看板が、自棄になったようにギラギラと輝き、よけいに周りに寂しさを漂わせている。この頃の不景気の影響は、こんな裏ぃまで浸透し始めている。

昭和の終わりには、誰も彼もが金融業者や不動産業者に踊らされて理性を失い、金の亡者、欲望の塊と化していた。その亡者どもと帳簿上の大金だけが狂い踊ったバブルが当然のごとく消滅し、皆が正気に戻ったときには、もう不景気の大波に飲み込まれつつあった。

私は雨に濡れた髪の毛とスーツの袖をハンカチで拭い去り、狭くて急な階段をゆっくりと上った。二階には［小花］だけしかなく、格子の引き戸を開けると、暖かいおでんの匂いがフウーと鼻先に漂ってきた。

「いらっしゃい……御木本さん、傘は持っていないの？」

圭子ママが右手カウンターの真ん中付近に設えた、おでん鍋の前に座ったまま、微かな笑みを浮かべて顔を向けてくる。色が白くて背が高く、そして目鼻立ちも大きいので、宝塚の男役を思わせる顔付きである。年齢はもう五十近くになっているのだろうが、華やかな雰囲気のせいか随分と若若しく見える。

「うん、出掛けるときは雨が止んでいたからね。役所を回るとき、傘は邪魔に

なるから持って出ないんだ」
「今日はどこまで？」
「霞ヶ関の役所を三カ所ほど回ったけど、相手が留守や会議中で収穫はまったくなしさ……まあこんなときは、さっさと切り上げてゆっくり飲むに限るね」と、聞かれもしないのに早すぎる仕事仕舞いの言い訳をする。
私はこの春に四十五を迎えたばかりで、建設関連の設計会社で営業次長をしている。業界では中堅の会社だが、官公庁の受注が多いので週のうち何日かは、霞ヶ関の官公庁営業に廻っている。不景気になって発注が減っているので、この頃は余計に訪問する回数が増えている。と、言っても本省からの直接発注はないので、これから先の施策内容や行政指導の、情報収集が主な仕事である。だから、残業してでも急いで片付けるような事案はあまりない。時間の融 はかなりきくのだ。
この［小花］はもともと一階にあり、圭子ママの母親が切り盛りしていたのだが、七年ほど前に亡くなり娘が後を引き継いだものである。一時は手伝いのお姐

さんも居たが、今は娘の真紀と二人でやっている。客の多くは母親のころからの常連が多く、〈おばあちゃん〉と呼んで今でも懐かしがっている。私が二十代半ばで初めて来たころは、おばあちゃんが入り口のおでん鍋の前にドンと座り、出入りする客や店内の一切を仕切っていた。

おばあちゃんは、まったく愛想のない顔で客の注文を聞いたり料理を拵えたりしているのだが、客が馬鹿騒ぎしたりすると怖い顔でじろっとにらむ。それだけで客は静かになってしまうほどの存在感があった。

こんな愛想のない店がなぜ繁盛していたのかと言えば、おでんや料理の美味しさもあるが、何よりもおばあちゃんの人柄、個性だったからだろう。

若いころの私にしては、幾分高めの料金だったので時々ツケにして貰うことがあったが、怖い顔で意見をされたことがある。

「自分の金で、持ち合わせの範囲内で飲みなさいよ。何処ででも、それが店に大事にされる一番の付き合い方だよ」

また、あるときはこんな小言も貰った。

「御木本さん、名刺は要らないんだよ。ここでは自前で飲む人は、どこに勤めていようが、どんな偉い先生だろうが、関係ないんだよ。ここで飲み食いするときはみんな同じだから。あんまり名刺を振り撒くと、出入り禁止にするよ」

私にとっては、櫛、簪を貰うより、ありがたい小言、意見であった。

誰にでもこんな調子だから、若い人には敬遠されていつも常連の年寄りばっかりだった。だが、田舎で育った私には落語や芝居の話が 白かったので、時々はっていたのだ。

私は三十過ぎてから十年ほど、地方の支店を転々としていたのでおばあちゃんが亡くなった頃はこの店には来ていない。今年の春に東京に戻り、十年振りに覗いてみて初めて様変わりに気づいた。

店自体が二階に移り、圭子ママも以前よりだいぶ歳を取った感じで板場にぽつんと座っている姿は、違う店に迷い込んだ気がしたものである。私を見てやっと思い出したらしく、白い牡丹のような顔にえくぼを浮かべて笑ったとき、やっと昔の雰囲気が蘇ってきた。

それから、週に三、四日ほどう常連になっている。

「今日は最初から焼酎にするの？」

「うん、〈白波〉を熱めの燗にして貰おうかな。それまでビールで繋いでいるよ」

圭子ママは手際よくビールと突き出しを出して、焼酎の一升瓶から専用の徳利に注ぎ始める。焼酎を入れた徳利は匂いが付いてしまうので、日本酒用とはになっているのだ。焼酎独特の強い香りが、ビールを飲んでいる私の席までプーンと漂ってくる。

「今日からおでんを半鍋から大鍋にしたのよ。味を見て欲しいんだけど、食べてみる？」

「もう夏も終わりかあ。じゃあ、豆腐と昆布とさつま揚げを貰おうか」

「さつま揚げは先ほど作ったから、おでんに入れる前のがあるわよ。食べてみる？」

さつま揚げはこの店の名物みたいなものである。おばあちゃんの頃から、店を

開ける頃合に手ずから鯵を磨り潰し、専用の鍋で揚げていく。その手製の揚げ立てをしょうが醤油で食べるのを、何よりも楽しみにしている常連客も多い。その為か、年寄りが多い為なのか、この店は四時過ぎにはもう客が入っていることが多い。

「さつま揚げはいつもながら美味しいよ。でも今日は皆さん遅いね。天気のせいだろうね……そういえば真紀ちゃんはどうしたの？」

私はまだ温かくて鯵の旨みが滲み出てくるような、店自慢のさつま揚げを頬張りながら、なんとなく落ち着かない気分で聞いてみる。

「真紀は大学のゼミの打ち合わせで少し遅くなるらしいわ。……このごろは不景気で、皆さん大変みたいよ。早い時間はいつも暇なのよね……」

圭子ママもこの頃は、なんだか憂鬱そうな顔をしているときが多い。元々おばあちゃんの血を引いているので、愛想の良いほうではないが、やはり売り上げが落ちているのが原因なのだろう。

「焼酎、お燗がついたわよ。お猪口出ているかしら、この頃よく忘れてお客さ

んに笑われるのよ」

「今日は大丈夫だよ、ちゃんと出ているよ。まだ呆ける年じゃないよ、ここのお客さんより、だいぶ若いんだからさ」と、口先だけの慰めを言う。確かにこの頃忘れっぽくなっているし、何だか上の空のときが多い。私は、まあ、色々あるのだろうと気にしないことにした。

和やかな、心地よい雰囲気をぶち壊してしまう、ドタドタと慌しい足音が階段から聞こえてきた。

「あら、もう井上さんの来る時間だわ！」

圭子ママは、階段を登ってくる足音でどの客か分かるらしい。もっとも井上さんなら私でも分かるが――。

「どうもぅー、ママ、今日は氷とタオル何個いる？ 何時ものりで良いかな。――よおー、御木さん早いねえ。どうしたの、仕事さぼったな。――おいおい、冷蔵庫にいっぱい詰め込んであるね！ 少し片付けないと氷は入らないよ。――あれ、

真紀ちゃんはまだなの、なんか足りなくて寂しいと思ったよ」

井上さんは、何時もの声高な早口で喋りまくり、勝手に冷蔵庫の中を掻き分け整理し始める。圭子ママの迷惑そうな顔など知らん顔である。ママも何時ものことなので、諦め顔でぼんやり眺めている。

「井上さん、ビール一本飲んで行く？」と、圭子ママはあんまり愛想の良くない顔で、おざなりに訊いている。

「いや、今日はまだ配達が残っているから、終わったら後で寄るよ。雨の日は道が混んでいるから大変だよ。――よお、御木さん、ママと差し向かいで羨ましいね」

井上さんはパアパアと喚きながら、また階段をドタドタと駆け下りていく。この辺の飲食店に氷とタオルを入れるのが、井上さんの仕事である。店は父親の代から続いており、渋谷でも道玄坂近辺の飲食店のことには生き字引のように詳しい。

井上さんは久志という名前と顔立ちが、ある高名な作家と似ており、この店では〈文豪〉と呼ばれている。だが、文章を書いたり俳句をひねったりは、全くし

ない人である。
　ちょっとした嵐が早々に立ち去った後は、また穏やかな時間に戻る。時間も空間も心なしか緩やかに過ぎていくようだ。
　私は燗のついた焼酎徳利から、備前焼のぐい飲みに継ぎ足す。このぐい飲みは浅草の陶器屋で買った安物である。形は悪いのだが、どっしりとした無骨な格好が焼酎に合うので、店に置いて貰っているのだ。
　白波を口に運ぶと、度数の高い焼酎独特の濃い香りが鼻先に充満する。口に含んだ瞬間、舌の上にビリッとした味が走り、やがてサツマイモのほのかな甘味が口中に広がる。先に飲んだビールを押しのけるように、喉から食道を一直線に下っていく。ゆっくりと温まってくる体と酔い加減が、酒飲みには堪らなく嬉しいひと時である。

　圭子ママは、ぼんやりと窓の向こうの井の頭線を眺めているだけだ。私もつられて目を向けてみると、いつの間にか点いた街灯の明りに、一段と強くなった白

い雨布が右から左にゆっくりと流れている。だが、窓を閉め切っているので、店内には何の音も入っては来ない。

「この雨なら、今夜はまた暇かしら……」と、ママはため息をついている。

私は他の常連客が来るまで、おでんを肴に焼酎をチビリ、チビリと呑んでいた。

静かになった店内に、ギシ、ギシとゆっくりと階段を上がる音が聞こえてきた。

「あら、加藤さんだわ。いつも時間りだから、すぐ分かるわね」と、圭子ママは嬉しそうな顔に変わる。お客さんさえ入れば、この世の終わりかと思われた憂鬱も、一瞬に消えるらしい。現金なものだ。

加藤さんは、ある会社の役員を今でも務めている老人である。もう七十近いのだが、まじめ一方の人でめったに冗談も言わないし、他人の馬鹿話に付き合うこともない。全日本真目党の党首に、ぜひ推薦したいような人である。だからここでは渾名などない。

何時も決まった時間に「小花」に来て、銚子二本をゆっくりと飲み、みんなの

話を聞きながら時を過ごす。その後に廻るコースも決まっているので、家族も安心しているらしい。何しろ、どの時間には何処の店に連絡すれば居るか、すべて心得ているのだ。

加藤さんの偉いところは、［小花］に来る前に毎日散髪してくる。何でも四十年来の馴染みの床屋があるそうで、毎日そこで髪と顔を当たって貰うらしい。何かの拍子に寄れないと、床屋の大将も加藤さんも気になって仕方がないそうだ。これだけ床屋が好きなのは、先祖に落語の「崇徳院」で和歌をもって歩き廻る、熊さんか鳶頭の血筋が入っているのだろう。

「やあ、御木本さん今日は早いねえ」と、私の後ろをりながら挨拶してくれる。

私の名前は常連の人たちには省略されて〈御木〉と呼ばれている。御木本ときちんと呼んでくれるのは、圭子ママと加藤さんだけである。

店は格子戸を入ると、コの字型にカウンターが延びている。私がいつも座る席は、格子戸のすぐ近くにある。コの字の下の横棒の真ん中付近である。常連の席はだいたい決まっていて、私の右横に井上さん、古ママが並ぶ。この列には週末

だけだが、予想屋の元さんもたまに座っている。窓側のカウンターには乾さん、諸木田さん、加藤さん、中さん治師匠、青山先生が占める。そして一番奥のカウンターには白田さん、赤石さん、前東先生がよく座っている。

古ママはもう七十を超えているのだが、近くで昔ながらの小さなクラブを経営している。もともとは京都の生まれらしいが、今は八王子に自宅があるので電車で っている。家への帰りがけや自分の店が暇なときは「小花」に顔を出す。ときどき京都弁を混じえて店内中を制圧するような、大きな声で喋りまくる。文豪さんを始め、へきえきしている客も多いのだが、おばあちゃんの友達だったせいか、圭子ママは頭が上がらない。圭子ママと区 するため〈古ママ〉と呼ばれているが、なかには古狸ママと呼ぶけしから 客もいる。

乾さんは五十を少し過ぎているが、いかにも精悍な感じの風貌をしている。あまり規模は大きくないが、印刷会社を経営している本物の社長である。ここでは〈カン社長〉と呼ばれている。営業で地方もよく廻り、日本酒にも詳しいが、食べ物道楽の一 も持っているので頼もしい存在である。もっともなかにはカン社

長が土産に持ってくる、全国の名物だけを待ち望んでいる輩も、居ないわけではない。

諸木田さんは〈カン社長〉の知り合いで、出版社で編集の仕事をしている。仕事がらみの打ち合わせを兼ねて、よく二人で顔を出す。名前が朋子なので〈トモちゃん〉と呼ばれている。三十五くらいの小柄な美人である。常連ではただ一人の女性客なので、みんなに大切にされている。

中さん治師匠は六十近くの噺家で、古典落語一筋のベテランである。ただ小柄で浅黒い顔付きのままに、芸風も渋く、なんとなく地味なのであまり売れていない。ただ、三十年 前の寄席ブームの頃は、テレビにも少しは出ていたので、古くからのファンも多少はいる。おばあちゃんもその一人だったらしい。[小花]では〈チユウさん〉で っている。寄席の出番が早かった時などに顔を出し、カウンターの端でひっそり飲んでいる。

青山先生は、私立大学の本物の教授なので、誰もあだ名では呼ばない。

白田さんは、私の会社と同じビル内にある機械会社に勤めている。もう定年を

過ぎているので、今は週のうち半分くらいしか出勤していない。蕎麦打ちに凝っているのでここでは〈名人〉と呼ばれる。

年に数回ほど、常連を集めて手打ち蕎麦を食べさせてくれるが、なかなかの出来である。

赤石さんは大手の建設会社に勤めている五十半ばの、頑丈な体付きで酒焼けしたごつい顔をしている。本人は現場にはあまり出ないのだが、ダム設計に詳しいので〈ダム屋〉と呼ばれている。ここで飲んだ後も、馴染みのカラオケ店やキャバクラに寄ってから家に帰る。とにかく、何時も酔っ払っている人である。

前東先生は、あまり売れていないが本業は小説家である。ほかにも絵を描いたり、書に入れ込んだり、俳句をひねったりしている。店の入り口に飾ってある、相撲取りがひっくり返って尻餅をついているおかしな絵も、先生の労作である。

このごろは講釈にも凝って、師匠について本格的な稽古をはじめているようだ。幾つかの演目が上がったらしく、人前でやりたくてウズウズしているようだ。

大きな体で汗っかきなせいか、やたらと風呂好きである。そのため、本当は「ま

えさき」と読むのだが、ここでは〈セントウ先生〉になっている。
と、一人一人の常連の顔を思い出していたとき、騒々しい足音を立ててセントウ先生当人が入ってきた。今日は一人でなく、連れがいるみたいだ。

「よおっ、今日は空いているな。ママを喜ばせるため、お付の者を従えてのご入来だよ。どうも御免なさいよ、御免なさいよ」
セントウ先生は、五十代と二十代の二人の女性を引き連れ、一番奥の指定席を目指して突き進む。先生のどら声で店内は賑やかになるが、二人の従者は 食らっている。
「おーっ、今日は呑んでくれ。おれの驕りだから、何でも頼んでおくれよ。よおママ、おでんは味が染みているのから、適当にご両人の分を入れとくれよ。ここのおでんは、うめえから食べてくれよ。それから、お酒を る燗で頼むぞ」
セントウ先生はご婦人二人の都合も聞かず、勝手にどんどん注文する。
「前東先生、今日は何か良い事がお有りなの?」と、ママが笑顔で尋ねる。

「おう、久しぶりに俺の本が出るんだよ。歴史小説を書き始めていたんだが、今度この二人が担当で出してくれる運びになってねえ」

セントウ先生は、どうやら本業に力を入れる気になったらしい。今日の盛り上がり方からすると、どうやら長い間の苦労が報われたのだろう。

「先生、まだ先は長いのですから呑み過ぎはだめですよ」

年かさの編集者が、それとなく釘をさす。痩せた体つきに、少し浅黒いが知的な顔と短めの髪、着ているスーツも品が良く人柄が窺える。前にも何回か、セントウ先生と一緒のところを、この店で見掛けたことがある。

若い方の女性は背の高いかなりの美人だが、無邪気に先生に話しかけながら、酒を飲みおでんをぱくついている。きっと、年かさの編集者の部下で、付いて廻っているだけなのだろう。

圭子ママは久しぶりの先生の嬉しそうな顔を見て、自分のことのように喜んでいる。が、私のほうを見て、にやりと笑うところを見ると、当分は〈寝床〉を聞かされる心配がなくなったことの方が嬉しいのだろう。きっと、ほかの常連客も

大喜びするはずだ。

セントウ先生の家は、世田谷も奥の多摩川沿いにある。代々が大地主で、今でもマンションを何軒か所有しているそうだ。自宅はその中で一番大きい建物の最上階を占有している。先生の小説が売れなくても、少しも生活には困らないわけだ。そのためか、何時も鷹揚で人の良い、実に楽しい人なのだが少しだけ疵がある。

先生の朝は実に早い。一年を じて五時前には起きて、多摩川の土手を散歩する。春先はノビルやフキなどを摘み、夏から秋には数多くの虫の声を聞きながら俳句をひねったり、講釈の稽古をしたりでひと時を過ごすのだ。それだけなら老人の趣味としては、羨ましいほどだが、その後がどうも問題なのだ。

六時半に近くの公園でラジオ体操を、近所の老人仲間と終えたらセントウ先生の活躍が始まる。自分の所有するマンションを廻り、ごみの出し方や廊下の掃除具合を一戸ずつ点検するのだ。先生としては、共同生活の規律正しい習慣を店子に教えるのは、大家の務めだと考えているだけなのだが……。

「おいおい小泉さん、そうゆうゴミの出し方はだめだよー。何時も言っているように、奥から順に積んで置かなきゃだめじゃないか、エッ。お前さんが手前に放り込んだら、後から出す人が困るだろう、エッ。……自分のことばっかりじゃ、しょうがないなあ」

「あぁ、これこれ田中さんとこのおカミさん、ゴミにはちゃんと名前を書かないといけねえよ。えェ何、まだ正式の夫婦じゃないから名前が違うてえの。理屈言うんじゃないよ、……ンとに、あの家は理屈っぽいねえ。何かあった時困るじゃないか、エッ。ンとに、しょうがないなあ」

「あっ、石原さん、昨日子供が廊下で戦争ごっこして遊んでいたが、あんな事あ、危なくていけねえよ。えっ何、子供の遊びだから仕方がない？そういうことじゃ、周りのみんなが迷惑するよ。そんなに戦争ごっこしたけりゃ、仲間を引き連れて、無人島にでも住みなよ。エッ、なにぃ、やってみたけど地元住民に追い出されたあ、情けないねえ、ンとうに」

「おいおい、そこに居るのは、林さんとこのおカミさんかい。何時も化粧が濃いねェ、どうだい、髪なんざまるで時代劇に出てくる花魁だねェ。後ろ向きならいいけど、前はあまり見せないほうが良いよ。それよかさあ、たまには子供の 倒も見てやんなよ、うちのマンションで一番出来が悪いと評判なんだから。それに部屋の廻りも少しはきれいにしたらどうだい、炊事場の窓なんか真っ黒じゃないか……ンとうに」

「あっ、大家さんお早うございます！」

「ああ、管理人さんお早う。挨拶はいいけどネ、入り口のドアがえらく汚れているねェ。外から、お客が来たら見っともないでしょ。エエ、だらしないマンションだと思われて、泥棒が安心して入っちゃうよ。エッ、なに？ この前きれいに磨きすぎたら、私がぶつかってしまった。あれは目が悪くなったんじゃなく、よそ見していたんです！ ンとに、なに言ってんだい。これ見なさいよ、エレベータの前に子供の自転車が置きっぱなしだよ。どこの家なんだい、しようがないねえ。管理人さんが良く見ていなきゃ 目じゃないか。ただ受付で座って居眠りし

ているだけじゃ、高い給金は払えませんよ。このご時世、不景気で仕事なんかないんだからね……ンとうに」

セントウ先生は当たるところ敵なしの、まさに〈小言幸兵衛〉そのものである。所有する三軒のマンションを廻り終え、家に帰りつくのは何時も八時頃になっているそうだ。

「やあ、ただいま帰ったよ。おいおいカアさん、私が今頃帰るこたあ決まっているんだから、お茶ぐらい用意しときなさいよ。今頃からヤカン持ち出してどうすんだい。ンとうに、気が利かないねェ、それじゃマンションの若い連中と変わらねえじゃないか。何年、夫婦してんだい、ンとうに……ああ、すっきりした！」

どうもセントウ先生の元気の源はこれらしい。朝早くから三時間も歩き回り、言いたいことを誰に遠慮もなくパァパァ喋りまくるから、ストレスなど溜まるわけがない。これじゃ一年中、風邪ひとつ引かないはずだ。

マンションの住民がなぜ暴動を起こさないかというと、最初に脅かしてあるからだ。何しろ、入居時に先生の家族 接があるのだ。そこで大家の主義主張をたっ

ぷり聞かされ、先生の試験に合格しないと入れて貰えないし、規律正しい生活態度を誓約させられるのだ。

それでも入居希望者が多く、住民もよっぽどのことがないと出て行かないのは、ひとえに家賃が格安だからだ。どうも周りより、三、四割は安いらしい。

林さんの奥さんなど、一度は子供のバットを持って飛び出しそうになったが、旦那さんが加古川本蔵ばりに後ろから羽交い絞めにして、〈妻の本分は家庭大事〉だと諭し、やっと思い止まったこともあるそうだ。とんだ、三段目である。

だが、接試験時に生活が苦しいと分かれば、涙を流して同情し家賃を半額にすることもあるそうだ。そういう人柄の良さ、人情の篤さが、何とか領地の平和を保っているのである。

セントウ先生の領地では、今の世知辛い世でも、昔の長屋さながらの感覚で、「大家といえば親も同然、店子といえば子も同然」の世界が生き続けているらしい。

「この頃ぁ、人情なんかなくなって好き放題に暮らすというけど、うちのマンションは違うよ。店子の連中は、おれの了見が分かっているからね、小言を言っても、

文句ひとつ返さず良く聞いてくれるぜ」
先生は酒が入ると時々自慢するが、なに、家賃につられて、泣く泣く我慢しているのが実情だろう。

これだけなら［小花］の連中は被害を受けることもなく、ただマンションの住民に同情するだけだが、講釈に凝り始めたとなると大問題なのだ。セントウ先生は前に一度、謡曲に凝ったことがあり何曲か上がったら、嬉しくなって〈謡の会〉を開いたことがあったのだ。
何しろ、マンションの最上階全部を占有しているのだから、何時もは住人たちの集会や、稽古事に提供している広い部屋もある。何より観客は店子を集めれば済むのだから、思い立てばなんでも出来る。
圭子ママも声を掛けられたので［小花］代表として、おでんの差し入れ持参で伺ったのだが、そのあと二、三日は店を閉めてしまった。
私が冗談に当日の状況を聞いたら、ママはため息混じりに話してくれた。

「あれは『寝床』の旦那も敵わないわねえ。酒肴は、おでんが恥ずかしくなるような、上等なものが用意してあったけど、命には代えられないものねえ。……だいたい先生の謡は、音程めちゃくちゃな上に、獣じみた奇声を張り上げ、余計な小節回しまで付いているから、まるで演歌だもん。……子供たちは始まったらすぐ泣き出すし、私も頭を畳にくっ付けるように下げていると、上の方を新幹線並みの騒音が走ったもんねえ。先生ほどの人でも、『河東節　親類だけに　弐段聞き』なんて川柳を知らないのかしら……」

セントウ先生は、それから暫くして謡曲はやめてしまった。何か心に期するところがあったのか、家族に捨て身の意見されたのか、謡曲の話は一切しなくなってしまったのだ。

だから、今度は先生が講釈に凝っていると聞いて、「小花」の常連が震え上がったのは言うまでもない。カウンターを見台に見立てて、パシッ、パシッと叩きながら唸っている姿は、とても謡曲どころの騒ぎではない。入れ込み方が半端じゃ

ないのだ。

冗談ではなく、皆は先生から何時〈独演会〉の告が来るか、気が気じゃないのだ。年配の客は戦争時の体験を持ち出し、赤紙の召集令状待つ気持ちだと、情けない顔で嘆いている。いくら事あるごとに、酒と肴を奢って貰っているとはいえ、物には我慢の限度がある。

中には、今から断りの口実を考えている不埒な客も居るが、圭子ママだけは、出席が否応なく義務付けられているから、どこにも逃げようがない。

先ほどの〈ニヤリ〉と笑った顔を見れば、最近の不機嫌の元は、これも一つだったのだろう。とにかく、セントウ先生が本業の小説に戻ってくれれば、周りの皆が平和で無事に暮らせるのだ。

そんな皆のちょっとした喜びをよそに、先生は呑み過ぎて、とうとうカウンターで眠ってしまった。従者の二人は扱いかねたのか、とっくに退散している。

時間も九時を過ぎると、［小花］は常連客でほぼ満員状態になっている。ママ

の娘、真紀ちゃんも無事出勤し、お燗や肴の受け渡しでてんてこ舞いだ。圭子ママも久しぶりの盛況に、大して蓄えもない笑顔の、大盤振る舞いである。狭い店内のあちこちで、客たちの談論、嬌声が飛び交い、飲兵衛たちのささやかな宴が繰り広げられている。

「元さん、こんどの日曜日の競馬は何が来そうかい」と、文豪さんが、しきりに厩舎情報を聞き出そうとしている。

「文豪、今週の予想はバッチリだから、買っておきなよ。安くしておくから」と、ポケットに入った封筒を引き出して見せる。

予想屋の元さんは多少酔っても、なかなか商売熱心のようだ。元さんは、名前を元田という他は何も分からない。何処に住んでいるのか、家族は居るのか、年齢さえも聞いたことがない。何かのゲンを担いでいるのか、週末の遅い時間によく「小花」に顔を出す。

元さんは、土日はいつも渋谷場外売り場の 路脇に立ち、昔ながらのスタイルで予想を売っている。壁に立てかけたベニヤ板に競馬新聞を貼り付け、赤のマジッ

クインクでなにやら書き込んである。人気馬には、ひと際目を引くように太い×じるしが付けてある。

前を り過ぎる人たちに、時々商売を思い出したようにだみ声で喋りかける。

「さあ、さあお客さん。このレースは穴だよー。本命は飛ぶよー、絶対荒れるよー」

元さんは、特に客引きをする訳でもないのだが、一レース三百円、特 三レースで五百円の安価な予想代が受けるのか、結構繁盛している。ただし、ザラ紙の手作り封筒に入った予想は、本命馬中心で何の変哲もない。だから、「小花」の客たちは誰も予想は買わない。

「元さんの予想はいらねえよ。どうせ本命ばっかりで、新聞と変わらねえじゃないか。何か穴馬の特 情報はないの?」

文豪さんはだいぶ酔ったのか、いつになく絡んでいる。そういえばこの頃、買う馬券が殆んど外れているみたいだ。これから秋の大レースを控え、少しでも資金を作って置きたいのだろう。

「そんな美味しい情報があれば、俺が黙ってありったけ買うし、今頃は一戸建て

に住んでいる楽隠居さ。なあ、俺は一年中あちこちの売り場に出かけて、うだるような夏の日も、震えるような空っ風の日も、立ちっぱなしで僅かな金を稼いでいるんだぜ。……そんな確実な情報なんかないって……。俺の長年の研究とカンを信じなよ」

「でも元さんはこの業界で長くやっているんだから、厩舎情報とか馬主情報が入って来るルートはあるんだろう」と、文豪さんは大きな声を上げて食い下がっている。

「そりゃあ、多少は入ってくるけど本物は少ねえさ。だいたい皆が知ってしまえば、そんな情報は役に立たねえよ。それに、なんぼ馬主や調教師が入れ込んでも、走るのは畜生の馬様だからな」

元さんは、にこにこ笑ってプロの余裕を見せる。懐に余裕はないのだが――。

確かにこの頃は怪しげな占い本や、出目の予想ばかりで、本格的に馬情報で勝負する予想屋は殆んど居ない。その点では元さんは、予想は頼りないが、貴重な本物の予想屋である。

いつもの本命予想も、長年の経験から生み出した、一番客を逃がさない為のテクニックなのだろう。なんといっても、的中率が高いには違いないのだから。

文豪さんはやっと諦めて、自分の焼酎をお湯割で飲み始めた。元さんとは古い知り合いらしく、時々二人して、昔の渋谷の街が下品で大人の遊び場所だった頃の、楽しい思い出話をしている。リキパレスや忠犬ハチが元気だった頃の話で、二人は大いに盛り上ることもある。

帰りがけに勘定をしている時、圭子ママが耳打ちをしてきた。

「明日、築地の市場に出かけるけど、御木本さんも付き合わない？」

「そうか、明日は土曜日か。うん良いよ、久しぶりに市場を廻ろうか」

私は待ち合わせ場所を決めたあと、店内の皆に声を掛け、文豪さんの れの濁声に送られて階段を下り、地下鉄に向かった。

地下鉄の銀座四丁目駅で降りて晴海 りに出たのは、ちょうど九時半だった。土曜日だが、まだデパートも開いていない時間なので、行き交う人も疎らである。

其の二

空は昨日の雨が嘘のように、真っ青にきらめいている。今日はだいぶ南風が強いようだ。海が近いので潮の香りがわずかに漂い、鼻腔からスーッと体に入り込んでくる。今日はまた、少し暑くなりそうだ。

左手に見える歌舞伎座では、もう十月の看板に掛け代えられている。まねきを眺めてみると、どうやら人気役者が揃いそうだ。時間を作って、一度覗いてみようかと思う。

万年橋を渡り、築地本願寺の大屋根が見え始めると、あちこちから市場に向かう人の群れが多くなる。飲食店の買出しらしい、大きな買い物籠を下げた男衆が足早に動き回っている。

圭子ママとの待ち合わせ場所は、勝鬨橋に向かうとすぐ右手、場外市場の東端にあるコーヒー店である。古くからの店らしいが、今はセルフサービス式になっている。そのわりに味は良く値段も安いので、何時も客が立て込んでいる。コーヒー、紅茶類のほかにスナック類もあり、朝食代わりに利用する人も多い。

圭子ママは鍵型に曲がった店内の、一番奥にある二人用テーブルにぽつんと座っていた。店に居る時と違い、紺色のワンピースに身を包んでいる。私を見つけ小さく手を振る。

「御木さん、お早う。眠くない？大丈夫？こんなに早くからごめんね」

「なんだか、今日は暑くなりそうだね。ここまで歩くうちに、だいぶ汗掻いたよ」

「なに飲む、私が奢るわ。その代わり、今日はだいぶ荷物が増えそうだけど、持ってくれる？」

「ああ大丈夫、飲み物は自分で買ってくるよ。その代わり店に戻ったら、ビール一本サービスだよ」

私は冗談口を叩きながら、カプチーノを買いに行く。ここのカプチーノのまろやかな味が好きで、私は何時も注文する。カウンターの内では、赤と黒の粋なチェックのユニホームを着た女店員が、忙しそうに立ち回っている。

「昨日、久しぶりに大入りだったから、来週分は大目に買っておきたいのよ。また、お客さんがいっぱい来るかもね」

大きな目を輝かせながら、嬉しそうな顔で話し掛けてくる。やはり、店が繁盛するのが一番の特効薬らしい。私も圭子ママの少女のような笑顔を見ていると、このところずっと引きずっていた、鬱陶しい家庭内のいざこざや仕事の悩みも、今だけは少しだけ晴れていくのを感じた。どうせ明日になれば、また頭上に広がり、息苦しい思いにべったりと覆われるのだろうが……。だからこそ、今日だけは忘れてしまおう、と思った。

コーヒー店の裏口から出るとそこはもう、場外市場十一番地の細い路地に繋がっている。

町会会館のりに出て、陶器店から左に曲がり一番人りの多い細い路地を南に向かう。久しぶりの晴れ間と土曜日が重なり、営業用の食材を買出しに来た人に混じって、観光客も繰り出したのか、ごった返すような活気に溢れている。

途中の小さなマグロ専門店で、圭子ママが中とろのサクを買うので、私もついでに小さなサクを貰う。デパートで買うより遥かに安いし、スーパーにはない上

物である。

一つ目の十字路を右に折れると、おでんに使う練り物や珍味を扱う店が数多く並んでいる。圭子ママは、いくつかの馴染みの店で、冗談口を交わしながら次々に買い物をしていく。私は品物を、大きめの買い物袋に詰め込み運ぶ役目だ。最初は片手でも持てたが、次第に重くなるのでヨタヨタと歩くが、圭子ママはどんどん先に進む。

私はお土産用に、角の大きな 子焼屋で、名物の松露と梅入りを一本ずつやっと買った。妻もこの店の 子焼きは好物なので、これがあると不機嫌も多少は和らぐ。

もうひとつ南側の りにある海産物の店で、おでん用の昆布を買い込みやっと一段落する。この店は〈おばあちゃん〉の代からの馴染みで、色々と 倒を見てくれるらしい。荷物運びが居ない時は、ここから宅急便を頼み、夕方までに着くよう手配して貰うこともあるそうだ。

私のたっての希望で、キングサーモンのハラスも買って貰う。個人で買うには

多すぎるので、店用にまとめて買った後で少し分けて貰うのだ。ハラスは他の店でも置いてあるが、キングサーモンを置いてあるのはここだけだろう。これから寒くなる季節には、家で熱燗の焼酎を呑むのに、脂の乗ったハラスは何よりも好きな肴の一つである。

「あら、もうお昼になったけど、御木本さん何処で食べようか」

「久しぶりだから、場内で鮨を食べようよ」

「そうね、宇佐美さんの行きつけの店にしようか。……あの親父さんの、元気な顔も見てみたいわね」

宇佐美さんは、「小花」の古い客である銀行の偉い人である。この頃はあまり来ないが、少し前まで渋谷の支店長をしていて良く来た人だ。鮨が好きで良く東京中の店を廻っていた。ただし、高級店ではなく大衆的な店が好きで、築地市場の鮨屋もだいぶ紹介してくれた人である。

「どうだろうね。あの親父さん、七月に新子の鮨を食べに行ったときは、まだ目みたいだったけど」

「そう、でももうだいぶ良くなったみたいよ。市場の仕入れは、やはり親父さんが遣らなきゃ 目みたいだし……」

新子とはコハダの幼魚である。初夏の七月初め頃に静岡・舞阪で捕れる一番物から有明海物と続き、七月一杯は楽しめる。江戸、東京と受け継がれた、夏の鮨の風物詩である。新子はこの店の名物でもあり、私も毎年楽しみにしているのだ。

小田原橋を り過ぎて南に向かうと、右手には鰹節店が並んでいる。削ったばかりの鰹節が、辺り一帯を大食堂の調理場のように出汁の薫りに包み込んでいる。その先にあるのが波除神社だ。築地市場の裏は隅田川が流れており、浜離宮の先はもう東京湾に繋がる。

この神社はさほど大きいわけではないが、市場関係の人がお参りを欠かさない大切な社である。

圭子ママは百円のお賽銭を納め、拍手をきちんと打ち、何事かを熱心に祈っている。意外だが、どこか古風な習慣を持っているのだ。日頃は神仏に無関心な私も、釣られてつい手を合わせる。

「何を、そんなにお願いしたの」と、私は聞いてみる。
「うふふふ、内緒、内緒よ。神様と二人だけの秘密なんだから」と、ママは悪戯っぽい目で笑っている。
波除神社の鳥居を出て、すぐ左手にある海幸橋を渡ると、もう其処は場内市場の入り口である。川風に乗って強い潮の匂いが漂ってきた。何でこんな所にあるのか、道路わきにぽつんと設けられた宝くじ売り場では、売り子のおばちゃんが退屈そうに座っている。
この時間には、魚の競りはもうとっくに終わり、競り落とした魚を運ぶ仲買人の車も疎らである。入り口から市場の右手に向かうと、鮨や洋食の店屋が十軒ほど軒を並べている。その先にある二軒の食堂も、朝から働き詰めだった市場の若い衆の、胃袋を満たすのに大忙がしである。
国立がんセンターの方に向かう場内路は、小型トラックの、荷台だけを取り外したような台車が、荷を満載にして水産会社の冷凍庫まで繁茂に行き交っている。若い衆が前でハンドルを操っているが、人や反対から来る台車を右に左に器

用に避けて走っている。私は立ち止まって、見事な運転振りを暫く眺めていた。

宇佐美さんの行きつけの鮨屋「佐文」は、長屋ふうの店舗が立ち並ぶ中で、一番奥のまた端にある。

「昔、おばあちゃんと来ていた頃は、この辺は市場で働く人しか来なかったのにねぇ。今ではテレビ番組で紹介するから、いつも客が一杯だもんね。だいぶ変わったわねぇ……」と、圭子ママが嘆く。

「テレビも築地全体を取材して、本物の味とか素材を紹介してくれれば良いけど、どうも特定の店ばっかり取り上げているからね。店も一時的には客は増えるだろうけど……多分、味も変わるだろうし、常連には来づらくなるよね」

「何で、そうなってしまうのかなぁ。なんか淋しいわねえ」

「大体がテレビの画 なんてもの、真の切り張りみたいなものだよ。それも素人が闇雲に撮って、アルバムにしたようなレベルだし、あんな画 で本物の味が伝わる訳ないと思うけどなぁ」

「善いとか悪いとかじゃなくて、テレビ番組に出たことだけが意味を持つのよ。

テレビが生活の中心になって、自分の判定を任せている人って、結構多いのよ」
「生活の中心というより、一家のご主人みたいなもんだね。今は値段も安いし、手軽に見られるから、家族の一員みたいに平気な顔で入り込んでいるもん。どこの家庭でもご主人の帰りは遅いだろうし、ちょうど良い具合の代役じゃないの。だから何の警戒もなく、画で演じられる事に自分を重ね、同化していくのだろうね」
「本当は、あんなに怖いものはないのにねぇ。画の向こうで特定の人たちが、打算と欲望で放送しているのが分からないのかしら。……こんなもので価値まで決められるんじゃ、真っ当に暮らしたり、商売したりするのは段々難しくなるわよ」
圭子ママの れた亭主は国営放送に関係していたそうだ。そのためテレビの内側には多少じているし、恨み辛みも加わるので批判も辛辣になる。
「それでも、ここに食べに来る人たちは、まだ良いほうかもしれないよ。テレビの前に座って見ているだけで、美味しいものを食べた気になって満足するよりね」

「でも、テレビ画 の疑似体験をしたくて、来る人も多いようだし、記憶が薄れたらもう見向きもしないみたいよ」
「その時はまた放送して貰うんだろうね。……多少、取材費を払っても、元は取れるだろうし……ね」
　私たちは行列が出来ている店を横目に、一番奥の りに入った。「佐文」の前には二人ほどが並んでいた。狭い店内はぎゅうぎゅうに詰めても十人ほどしか座れない。この頃は昼の食事時になると、暫く待たされることが多い。やはり、付近に人出が多くなると自然に流れてくる客も多いようだ。
　店の板場では、親父さんと三十過ぎの職人が忙しく立ち働いているのがガラス越しに見える。
「いらっしゃい。旦那さん、お久しぶりです。今日はお二人ですか?」と、顔なじみの娘がガラスをあけて挨拶してくる。
　この店には圭子ママとは連れ立ってきたことはない。二人で来た時は、何時もは交差点近くのてんぷら屋で食べることが多い。今まで、お互い々に来ている

ので、店の人も訝ったのだろう。
「ねえ御木本さん、私たちどう見られているのかしら」
ママは悪戯っぽい顔を向け、囁いてきた。何時もこんなことを楽しんでいる。妙なところがある人だ。私はときどき会社の女の子を連れてくるので、誤解されても困るのだが口には出さなかった。
「いらっしゃい。何から握りますか?」
席に着くと、若い板前が鉄火巻きを握りながら、不意に顔を上げ訊いてくる。親父は何時もの り、じろっと見ただけで愛想も言わない。板場に立っているところを見ると、体はもう良いのだろう。
「私はスズキとアカガイを貰おう。ママはどうする?」
「うちも同じもの」
白木のカウンターに鮨置きの緑鮮やかな笹葉が置かれ、手際良くビールと突き出しのイカの塩辛が並べられる。ここの塩辛は自家製で、浅く漬けてあるのでイカの味がほんのりと残り、ビールにも酒にもよく合う。

ネタの質が良いのか、下拵えが上手いのか、鮨を口に含むと甘味がほのかに広がってくる。親父が握った鮨は、シャリに僅かに残る手の暖かさも心地よい。さすがに長年、魚市場で店を開いているだけのことはあるのだ。

「美味しいわねぇ、今日はいっぱい食べようかしら」

「もう少し秋が深まると、魚が美味しくなるから酒も進むよね」

「うちのお店も、お客さんいっぱい来て欲しいわ」

圭子ママは、なかなか商売のことが頭から離れないみたいだ。

私たちはコハダ、カンパチ、中トロ、アナゴと食べ進み、カンピョウ巻きを胃袋に収めやっと終わりにした。

勘定を終わり店の外に出ると、仲買業者の若衆たちが、今日の後片づけで忙しく動き廻っている。倉庫の間から見上げると、青々と晴れ上がった高い秋空に、を添えるような薄い白い雲の塊が流れていく。

不意に魚と潮の入り混じった、いかにも魚市場らしい匂いが体を幾重にも包み込んできた。

「本当に良い天気になったわねえ。何だか、魂が空の神様に吸い取られそう……何もかも放り出して、あの雲に乗ってどっか遠く旅に出掛けたいわ」

「ママは飛行機にも乗ったことがないじゃないか」と、私は混ぜっ返す。飛行機どころか新幹線にも一、二回しか乗っていない筈だ。

「飛行機なんか嫌いなの！――あんな鉄の塊が空を飛ぶのは変よ、まともな人間が乗るものじゃないわ。そんな無粋なものじゃなく、雲がいいわねえ。ふんわりしていて、いかにも空の乗り物じゃない。寝転んで世界中を廻りたいわあ」

そりゃ、昔は仙人の移動手段だったから、乗り心地は良いだろうが、今は搭乗口がどこにあるのか誰も知らないよ。――と、突っ込みたかったが、圭子ママはときどき の世界に入り込んで、そちらを現実と思ってしまうから、あるいは乗り方を知っているのかもしれない。そんな気にさせる不思議な女の人なのだ。

私たちは買い込んだ品物の入ったビニール袋を両手にぶら下げ、銀座四丁目の地下鉄駅まで歩くことにした。よく見ると、圭子ママもどう見ても仙人の知り合

い、という格好ではない。
　工事中の万年橋を渡る頃から、圭子ママは歩き疲れたのか口数が少なくなった。若い頃から運動をすることが嫌いだったので、荷物を持って少し長く歩くと、大変な騒ぎになる。今日は天気が良かったので地下鉄まで歩くことにしたが、いつもだとタクシーで渋谷まで帰ってしまうのだ。
「暑くなってきたわ。足も疲れたし、どこかで休みましょうよ！」
「歌舞伎座の入り口に床机が置いてあるから、そこまで我慢して歩こうね」
　切符売り場の脇に置いてある床机には、緋色の布が敷いてあり、いかにも芝居小屋らしい風情が楽しい。劇場の中は来月の出し物の準備で忙しいのだろうが、表玄関の大きなガラス戸は閉まったまま陽の光を照り返し、人の出入りもなく静まり返っている。
　やや西に傾き始めた太陽が、高く蒼く晴れ上がった空の向こうから、夏を惜しむように精一杯の輝きと熱気を伝えてくる。私たちは吹き出る汗をハンカチで拭きながら、ぼんやりと晴海 りを行き交う車と、人の流れを眺めていた。時の流

れが少しずつ遅くなっていくような気になる。
「いつの間にか秋になったのねえ……何だか今年も、あと少しでお正月が来てしまうわ。一年が、あっという間に終わるような歳になってしまった」
「もうお互いに若くないからね。……何時までものんびりしていられない、もう残りが少なくなったんだよ」
「そうね、もう若い時みたいな、煌くような楽しい時はないのよね……街路樹の葉っぱが一枚ずつ散って行くように、人生も少しずつ終わるのね。……きっとそうなんだわ、悲しいけど……」
「そうだよ、昔から人生五十年と言うしね。もう俺たちの活躍できる表舞台は、二度と来ないのかも知れないね」
「でも悲しいわね。このまま歳を取っていくだけなんて」
「悲しいさ。でも、所詮人の一生なんて〈下天の内を比ぶれば　夢幻の如くなり〉でしかないのさ。まあ、死 のはまだ多少先だろうから、生きていることを精一杯に楽しむしかないね」と、私は直実になったつもりで慰める。安っぽく扱われ

た敦盛が、何だか墓の中で怒っている気がする。
人間はどう頑張っても、誰でも死 ことは避けられないし、逃げ廻ることにも限度がある。それなら、死を恐れることも無益だし、死を軽んじることも勿体ない。

不意に正 玄関の大扉が開き、小柄な女性が走り出してきた。私たちを見ると、驚いたようにペコンとショートカットの頭を下げて挨拶をする。
「十月の芝居は観に来てくださいね。待っていますよ！」
「ありがとう。楽しみにしているよ」
この女性は、劇場案内係りで顔馴染みだった。名前は知らないが、誰にも明るい応対が印象に残っている。
「誰なの？」
「劇場の座席案内の人。親切な人なんだ」
私は、女性が晴海 りを松竹本社の方に、小走りに掛けて行くのを見送っていた。
「何だか春風みたいな娘さんね。可愛くて、若々しくて、生きているのが何でも

楽しいみたい。……うらやましいなあ、毎日芝居は見られるし、好きな役者さんが出ている時なんか、嬉しくてしょうがないでしょうね」

「そうは言っても色々な客の相手をする訳だから、楽しい事だけじゃないさ」

「私も子供の頃は宝塚のファンで、日比谷によく観に行ったのよ。そんな時には、劇場の人が羨ましくて堪らなかったわ。……その頃おばあちゃんに連れられて、此処にもよく来たんだけど、何時も寝ていたのよ。今思うと勿体なかったわねえ……やはり、あの頃が一番楽しかったわ」

圭子ママは、娘が消えていった万年橋のほうを見ながら、白い悲しそうな横顔を見せている。誰だって五十近くになれば、世間という辛い仕組みに取り込まれ、義理や打算、欲という嫌なしがらみが体中に染み込み、笑顔もつい強張ってしまうものだ。

だが、どんなに未来が真っ暗で希望が持てなくても、楽しかった昔にはもう帰れないし、これからを考えるしかない。それが人生というものだろう。

「そろそろ店に帰ろうか。もう開ける準備したほうがいいよ」

「あら、もうこんな時間。大変だわ、早いお客さんも居るからね」
ママはすっかり現実に帰ってしまったが、先ほど見せた寂しい横顔は、いつまでも私の胸に焼き付いていた。

地下鉄で渋谷に帰り着いた時は、もう三時をとうに回っていた。圭子ママは店のカウンターに買い込んできた品物を並べ、手際よく冷蔵庫に詰め込んでいく。私はビールを一本、お賃代わりに貰って呑みながら、井の頭線の向こうに見える狭い青空を眺めていた。
「おでんは火を入れたばかりだから、まだ時間が掛かるわ。つまみに刺身を切りましょうか？　あ、焼酎もお燗しようね」
「うん、今日は〈伊佐美〉にしてくれる。早い時間からあまり酔っ払いたくないからね」
伊佐美は二十五度なので、白波の三十五度に比べてそれ程きつくない。その分コクも緩やかになるが、ゆっくり飲みたい時や、体が疲れている時には程よい焼

酎だ。燗の付いた徳利から、備前の厚手の盃でゆっくり口に含むと、柔らかくて優しい甘みを含んだ、酒の精がゆっくりと喉元を流れていく。今日半日も歩き回った疲れや何もかもが、酒に絡め取られてスウーッと溶けていくのが分かる。

「ふうぅー」

「あら、溜め息をつく度に幸せも少し逃げるそうよ」

「この酒がある限り、少しくらいの幸せなんか要らないさ」

「お酒が飲める人はいいよね。……多少の嫌なことは忘れられるから」

「その代わり酔いが醒めた後では、嫌な事が倍になることも有るからね。それに嫌で飲む酒は、どうせ酒の神様からしっぺ返しを食らうさ」

「そうよね、お酒は楽しく味わって、美味しく呑むのが一番よ。――それに、文句を言わずに現金払いがね」

「ハハハッ、ママにはそれが一番だね。売り上げ倍増が、何よりの極上酒だね」

私も、思い悩む事が馬鹿らしくなった。

売り上げには異常に敏感なくせに、圭子ママ自身はビールをコップ一杯も飲め

ばダウンしてしまうくらい、アルコールには体質的に弱い。その代わり甘い物や、ご飯の類は幾らでも大丈夫の口である。

　少しずつ空が暗くなると、僅かに夕焼けが渋谷の町を覆い始めたみたいだ。井の頭線の駅舎の向こうに、頭だけ出しているビルの西向きの壁が、薄オレンジ色に染まってきた。この店から夕陽らしい情景を見たのは始めてである。きっと明日も良い天気になるのだろう。

「夕焼けがきれいだよ……もうそろそろ夜の世界が始まるね。」

「本当、きれいね。きっと箱根山のほうでは、景色が何もかも真っ赤に染まっているのかなあ。……ねぇ、一度で良いから、富士山に登って夕陽をゆっくり眺めてみたいのよ。きっと極楽浄土みたいに、空や陸や海を、何もかも黄金色に染め上げながら、夢のような風景の中に沈むんだわ」

「おいおいママ、富士山は築地から銀座の交差点まで歩くのとは違うよ。まあ、お山にロープウエーが付くまで我慢するしかないね」

「うるさいわね。心よ、気持ちしだいで風景は見えるものよ。人の心だって、一

生懸命になれば見えるのよ」

「人の気持ちまで見えるのは堪らないなあ」

「そうねぇ、よく考えると人の心は無理よねえ。だって、自分の心だってよく判らないもの……それで今まで失敗ばかりだったわ」

圭子ママは何を思い出したのか、少し虚ろな顔つきになってしまった。誰の人生でも、幸せと不幸せが交じり合うものだが、ほんの僅かでもどちらかが強いと、一生その気持ちが固まってしまうのだろう。

だが圭子ママだけでなく、誰にもまだ人生は残っているのに、五十歳近くになると、一生が見えてしまったような気になるのはどうしてだろうか。平均寿命が七十をはるかに超えても、所詮人に出来ることは五十 がピークと、本能的に分かっているのかもしれない。

それなら五十を過ぎたら、神様から貰ったおまけの人生として楽しめば良いものを、金や名誉欲が一段と強くなり、生臭い匂いを漂わせる老人たちが多すぎる。年寄りの強欲ほど、見ていて悲しいものはない。

「あら、お客さんみたい！」
ママの弾んだ声に答えるように、入り口の階段をゆっくりゆっくり登ってくる音がする。私も少し酔った顔をガラス戸の入り口に向けた。
「ママ、もう開けてはるの？」と、甲高い声が先に入ってくる。
ガラス戸を開けたのはやっぱり古ママである。いくら年配の客が多いとはいえ、これほど時間を掛けて階段を登ってくる人はそうは居ない。一瞬、圭子ママの顔が曇ったような気がした。このごろは何かと小言を貰うことが多いと、この前嘆いていたのだ。
「ママ、まだ下の看板に灯りが点いとらへんで。休みかと思うたわ」
早速のご意見である。圭子ママは慌てて階段を下りていく。
「御木さん、お久しぶりやなぁ。元気どすか？　今日は早ようから呑んではるのどすなぁ。今日は天気が良うおましたなあ、京都もこれから紅葉がきれいになるんどす」

古ママは、早口の京都弁らしいものでまくし立てる。私は関西で暮らしたことがないので、本当の京都弁や大阪弁がどんなものかは知らない。たぶん京都弁はもっとゆったりしたものと思うが、それでも何となく、ママが来ると華やいだ気分になるのだ。だからこそ、七十を過ぎてもまだ店が切り盛りできるのだろう。

「ママ、今日は早いですね。これからお店に出るのですか」

「いえ、ちょっとパーティがおましてなあ、そやさかい出て来たんどす。ほれ、ここにも良くお見えになる青山先生、今度退官されるらしいんどす。青山先生は、長い間スキー部の 倒見ておられたでっしゃろ、それで部のＯＢたちがお祝いのパーテイを開かれたんどす」

青山先生は京王沿線にある私立大学で古典文学を教えているそうだ。だが、この店に来る時は何時も酔っ払っているので、何を喋っているかも良く分からない人だ。古ママとは四十年に近い付き合いとかで、特 に仲が良い。

「青山先生、大学辞めてどうするのかなあ。また のとこころで教えるんだろうか」

私はいつも酔った赤ら顔で、ライオンみたいなぼさぼさ髪を揺らし、ニコニコ

して酒を呑んでいる先生を思い出し、二人に聞いてみた。
「先生は何時も田舎に帰りたがっていたけど、青森じゃ遠すぎるよね。簡単に出て来られないもの」と、戻ってきた圭子ママはしんみりとした顔で答える。青山先生はこの店でも一番の古株の一人なのだ。
「後で此処にも寄ると言うてはったから、色々聞いてみたらよろしいがな」
古ママの声も何となく沈みがちである。
「先生、好きな浄瑠璃の研究でもして暮らせば良いのにねぇ」
「そう言えば、その方 では結構有名らしいね」
「先生は昔から近松が好きで、論文もようけ書かはったんどす」
先生は、古ママが言うとおり、近松の作品が掛かると文楽でも歌舞伎でも良く解説してくれる。ただ、酔うと青森弁を交えて喋るから、半分も理解できないのが残念である。良く考えると勿体ないことだ。
三人で暫く不景気や客の話、この頃の渋谷で評判の店屋の裏話を続けていると、ドタッ、ドタッとよろめきながら上がってくる足音が聞こえてきた。

「よう、今日はもう開けているのかい？」と、ガラス戸を引き開け、噂の御本人が顔を覗かせる。
「先生、今日はおめでとうございます。本当にご苦労様でした。でも、［小花］はまだ卒業しちゃ嫌ですよ」
「ははは、酒だけは卒業できそうもないなあ。卒業するのは葬式の時だろうな。本当のこと言うと、これから何の心配もなく呑めるのが嬉しくてたまらんのだ。ははは、今までは、これでも一応は教職の身だったからね、ふうう。とにかく一本つけてよ、ママァ」
　青山先生は、いつもより大分機嫌が良い。よろけながらも店内を行進し、古ママの隣にたどり着く。皆からお祝いされたせいか、嬉しくて仕方ない風情で引退の暗さは微塵もない。何だか新しい生活の予定でもあるのだろうか。
「先生、バッグが落ちそうですからお預かりしますよ」
「おう、でも此れには大事な物が入っているから、なかなか渡せないぞ」
「何か、大金か宝石でも入っているの？」と、圭子ママが手に取ろうとする。

「そうじゃないんだ。俺にはもっと大事なもんだ」
先生はバッグから円い筒を取り出す。皆が不審そうに見守る中で、先生が広げたものは表彰状みたいだった。
「先生、その表彰状みたいなもの、なんどすかぁ」と、古ママが覗き込む。
「スキー部の教え子たちが贈ってくれた感謝状だよ。俺はこんなに嬉しいことないよ。――そりゃ自慢するような権威のあるものじゃないよ。でも、大学で三十年近く 倒見てきたが、欲得でやってきた事じゃないからね。でも、これを渡してくれた教え子達も、もういい親父になっているんだが、まだ当時のことを色々と覚えていてくれるんだよ。本当に感謝してくれているんだ……それが嬉しくてね。本当に嬉しかったよ。どんな勲章よりも有り難いね、うーん、本当だよぉ」
先生は顔をくしゃくしゃにして、喋り続けている。酒の酔いも加わって、だんだん同じ話の繰り返しになるが、先生の嬉しさが伝わるので、聞いている方も気持ち良くなる。
「なぁ、御木本さん。一回でいいからこれ読んでくれよ。頼むよ」

先生が変なことを言い出す。表彰式の真似事をしてくれと言うのだ。他に客はないし、楽しいからみんなでやろう、やろうと盛り上がる。

「青山真一殿、スキー部を長年指導してきた、貴方の功績に対し……」と、表彰状の文句を私が読み上げる。

先生は、直立不動の姿勢をとりながら、顔を高潮させてしっかりと聞いている。ただし、酔いで上半身は前後にゆらりゆらりと、揺れているが。会場の観客たち――と言っても、圭子ママと古ママだけだが――も懸命に拍手する。たった四人だけの表彰式だが、何とも気持ちの良いセレモニーが何度も繰り返された。

私は酒の酔いもあったが(これからは、色んな話をゆっくり聞かせて貰おう)と、心の片隅で自分にそっと呟いた。

自分の席に戻った先生は、古ママと楽しそうに笑い合いながら、覚束ない手付きで盃を口に運んでいる。

「先生、嬉しい時の酒が一番でしょう。ところで、この後はまた、どこかで教えるんですか」

私は今後も「小花」で会えるのか、少し不安で聞いてみた。地方の大学に行かれたらそうは会えない。

「いや、俺はもう教員は卒業するよ。人に教える柄じゃないしね……少し浄瑠璃の研究をしてみようかな、と思っているんだがね……こんなに酒ばっかり飲んでいたら、目だろうけどね」

「先生、ようけ頑張って、近松をもっと宣伝しておくれやす。うちは上方の生まれどっしゃろ、だから近松の心中物が昔から大好きどすねん」

古ママは酔いが廻ると、少しずつ声が高くなってくる。もう何十年も前に見た芝居の、一つ一つの場が強い思い出として残っているのか、古い役者の所作や形の良さを、何回も繰り返し繰り返して話すことがある。こんな時は本当に幸せそうな顔になる。

「近松は、戦後になってから評価が高くなったから、まだ良く研究されていない部分もあるよ――。俺もね、もう一度勉強し直すつもりさ、ふう」と、先生はだいぶ怪しい口調で呟く。

「昔の身分制度の時代だけじゃなくて、今でも男と女の心中は後を立たない、という現象もありますからね」と、私も会話に加わる。
「そうだよねぇ、……男女がどうにも成らなくなった時は、心中という行為に酔って自分たちを美化するのが、一番都合が良いのかも知れんなぁ……」
先生は、酔った頭でも結構厳しい見方をする。この辺は、さすがに長く教壇に立っただけの事はある。
何時もの常連が顔を見せるころには、先生はカウンターで寝込み、私と古ママは、もうかなり酩酊し、コックリコックリと舟を漕いでいた。圭子ママだけは朗らかな声で、客たちを迎え入れている。

其の三

チュウさんこと、中さん治師匠が久しぶりに寄席のトリを勤めることになり、急遽結成された〈チュウさん応援団〉は圭子ママを団長に、セントウ先生、カン社長、加藤さん、文豪さん、古ママ、青山先生、それに寄席はテレビでしか見た事のない私も駆り出され、総勢八名が新宿の寄席に出かける事になった。

その日は十一月にしては暖かい、小春日の陽射しが溢れる日曜日であった。

私たち〈チュウさん応援団〉一行は天気の良さにつられて、新宿駅東口から新宿 りを伊勢丹まで歩くことにしたが、日曜の歩行者天国の人出に巻き込まれ、人波の複雑な流れのなかをヨタヨタ歩く羽目になった。

寄席のことに一番詳しいセントウ先生が自ら先頭に立ち、大きな体の上に両手を突き出し方向指示器の代用をするのだが、逆風と潮流にあちこちと流されるヨットのように、真っ直ぐには中々進めなかったのだ。新宿では、ヨット乗りなど何の役にも立たないらしい。

何しろ御一行の平均年齢が高いし、不埒にも青山先生のように酒が入っている

人もいるので、伊勢丹に着いた時には皆ヨレヨレである。なかでも、セントウ船長が一番くたびれた顔をしている。どうも朝の散歩とは勝手が違うようだ。

目指す寄席［新宿亭］は伊勢丹から更に明治 りを渡り、二つほど奥の小さなりに、古い木造建築のくせにデンと威張って構えている。周辺には、小さな飲食店が密集しており、角を曲がると、怪しげなスキャンダル雑誌が入っている古ぼけたビルもある。大きな寿司屋のある広い りの先には、ソープランドの看板が周りに遠慮がちに光っている。

いかにも雑多な街並という風情で、寄席の立地条件としてはこの上もない環境である。だが、先ほど新宿 りに溢れていた人たちは、どこかに集団蒸発でもしたように消え失せ、ここには僅かな姿しか見えない。まるで、異次元空間のような佇まいである。

周りの飲食店は開店したばかりらしく、焼鳥屋の若い店員が、もうもうと吹き上がる煙の中で威勢の良い声を張り上げ、疎らな 行人に声を掛けている。

時計を見るともう五時を過ぎていて、新宿亭も夜の部がすでに始まっている。客を迎え入れるテンテン、テレツクの軽やかな太鼓の音色が、江戸情緒とでもいうのか、数十年も時代を遡る手助けをしているようだ。

〈チュウさん応援団〉一行は、圭子ママがちゃっかりと団体割引券を買い、右手にある薄暗い入り口から客席に入る。場内は、ホンワリとした蛍光灯に照らし出され、いかにも古臭い〈寄席〉のムードが満ち溢れている。

真四角に近い客席は中央部に一　の椅子席があり、左右が畳の席となっている。二階席もあるようだから、三百人ほどが入れそうだ。私たちは右側の畳席の真ん中ほどに陣取った。手摺にもたれ椅子席の客を見下ろすように、セントウ先生、カン社長たちが前列に陣取り、圭子ママとブンゴウさん、青山先生、それに私が後列に大人しく座る。もっとも、青山先生とブンゴウさんは後ろの柱にもたれて、売店で買い込んだビールを大事そうに飲み始めている。

高座では若い噺家が汗だくになって、私でも知っている〈寿限無〉を懸命に演

じている。何となく古臭い角刈り頭に、大きな丸い顔が緊張で真っ赤になっている。客席は五分ほどの客が入っているが、殆ど笑い声が起こらない。たぶん前座になって間もない噺家なのだろう。習いたての台詞を何とか早口で喋ろうとしているのだが、ぎこちなくて硬い言い回しに、客席も笑うだけの余裕が生まれないみたいだ。

私が、こういう商売も大変だなあ、と思い始めているうちに吹き出た汗を拭いながら高座を降りていく。次の演者のために座布団を裏に返すときの、ホッとしたような照れ笑いが何とも初々しい。

この出来立てホヤホヤの新人も、あと十数年もすると真打とかに昇進し、この日の高座が笑い話になるような、一人前の噺家に成長するのかもしれない。ヘラヘラしているように見えても、一人前の芸人になるには長くて辛い修業が続くのだろう。そう思うと、何だか無性に応援したくなる。

高座では、似たような若い噺家が続いて上がる。そのあとは落語の合間に漫才や奇術、俗曲などが、手馴れた芸で客席を大いに沸かす。特に大神楽の三人組は、

ソフトボールの球ほどの鞠を使い、和傘の上でグルグル回したり、左手から肩の後ろを越して右手に移したりの芸の後、頭の上に小さな神輿をこさえて年輩の客を大いに喜ばせる。

中入り前に出てきた紙切りの笑楽という人は、客から題をもらい色紙を鋏みで切っていく。下座の三味線の音に合わせ、大きな胡麻塩頭の体を揺らしながら、二、三分ほどで絵柄を切り抜く。子供の夕涼みだったり、狸の月見だったり、昔の有名な歌手の顔だったりする。鋏を動かす間にも軽口を交え、客の耳目を引きつけて離さない。鮮やかなものである。セントウ先生は柳と芸者の絵柄を大声で注文し、切り終わった色紙を貰い大威張りである。私たちは後ろで顔を伏せている。

二時間ほど過ぎた頃に賑やかな掛け声とともに、いきなり揚げ幕が下りる。セントウ先生に聞くと、中入り、とかで休憩時間だと教えてくれた。客は椅子から立ち上がり、トイレに駆け込んだり売店に向かったりして思い思いに過ごしている。何だか時間が、ここでは緩やかに流れていくようである。うっかり居眠りを

してしまったら、二、三ヶ月がたちまち経っているかも知れない。
　圭子ママが、皆の分の酒とツマミを買ってくる。職業柄こんなときは手際がよい。私はビールと塩昆布を貰い、隣の青山先生を真似て足を投げ出し、のんびり天井を眺めながら呑み始める。
「御木さんは、ここの寄席は初めてかい」と、青山先生が赤い顔で聞いてきた。
「ええ、ここと言うより、寄席というところに来るのが初めてです」
「どうだい、いろんな種類の芸人が出てくるから 白いだろう」と前からセントウ先生が声を掛けてくる。
「落語と色物のバランスがね……ウイー、フウゥ、なかなか良いですね」と青山先生がビールを飲みながら答える。
　先生はあまり笑わないから興味がないのかと思っていたら、案外良く見ているようだ。
「でもセントウ先生、こんなに芸人がたくさん出て、このくらいの客数で経営は大丈夫なのですか」私は先程からの心配事を聞いてみる。

「まあ、儲かりはしないだろうが、多少は売店の売り上げも有るし、何とかなるんだろう」と、セントウ先生はコップ酒を飲みながら、多少無責任な答えを返す。
「そうそう、客が少ない時は多少でも売り上げに協力しなけりゃね。ママ、お酒はもうないの？」どうやら青山先生は、本格的に飲み始めるみたいだ。嫌な予感がする。
　ブンゴウさんやカン社長は、セントウ先生が貰った色っぽい色紙を見ながら感心している。男は歳を経ると、色も風情に憧れるらしい。客席には観光客らしい団体が入り、ようやく八分ほど埋まる。

　場内に賑やかな太鼓が鳴りわたり、後半の番組が始まった。いよいよ私たちの中さん治師匠の出番が近くなる。
「おいおい、後ろの衆は酒もいいけど、師匠が出る時は掛け声くらい頼むよ」と、セントウ先生が振り返り、自分も赤い顔で念を押す。
　チンチン、トントン、チントンシャン、チンチン、シャン――軽やかな三味線

の音に乗って中さん治師匠がウキウキと軽やかに出てくる。何時もは陰気な浅黒い顔が、高座の照明に照らされキリッと引き締まってみえる。いかにも寄席芸人の粋な顔立ちに変わっている。

待ぁってました、チュウサン！中さん治、たっぷりぃ！と、客席からかなりの声が掛かる。もっとも我らの応援団が一番賑やかだ。高座よりこちらを眺めている客も多い。

中さん治師匠が高座で頭を軽く下げた後、静かな声で語り始めた。

「えぇー、毎度のお運び有り難くお礼申し上げます。今日は私が最後でございますので、あと少しのご辛抱をお願いします。私がトリをとる機会なんぞは滅多に有りませんので、今夜は少ぅし変わった話を申し上げたいと存じます」

師匠は、どうやら古典でなく新作を語るらしい。中さん治は古典一筋でやってきたので、応援団の連中も興味深げな顔つきである。

「エエー、何の商売でもなかなか難しいものですが、私たち噺家も気楽なようでも、若いうちは中々苦労をするものでございます。
　これは、私が若い頃に金銭で苦労していた時分に、先輩の噺家から、自分もこんな内職をしたことがある、と聞いた話が元でございます」

女房「ねえ、お前さん。今日から町内の出稽古に出掛けるんだろう、うまくいくと良いけどねえ」
馬朝「ァァ、今日は寄席の出番がないから、一ん日で五軒ほど廻ろうかと、思っているんだがねえ。多少は、家計の足しになるだろうからな」
女房「済まないねぇ、こんな苦労掛けてさ。お前さんの芸の邪魔にならなきゃ良いんだけど……一軒目は呉服屋のご隠居さんの家だよね。うまくやれば今後も贔屓にして貰えるよ。頑張っといでね」
馬朝「うん、ご隠居はいい人だからな。気に入って貰えると後が楽だがな、うん」

馬朝と言う噺家は、もうすぐ真打の声も掛かろうかと言う、二つ目でも古株で御ざいます。しかし、腕は達者なのですが、地味な芸風のためか、贔屓客のお座敷も余りかからず、懐は年中ピーピーと借金鳥が鳴いているという具合でして――。おまけに年寄りの両親に子供も四人養っているという、親孝行の国から親孝行を広めに来た、親孝行大使じゃないかと楽屋で噂されて……そんな馬鹿な話はありませんが。

隠居「ヤァ、やっと来たかい、師匠待っていたンだよォ。マァマァ、こっちにお上がり、貰い物だけど、上等の羊羹があるからね、たんとお上がりよ。おい、婆さんや京都の呉服屋から頂いた宇治のお茶があっただろ、少し濃い目に入れてやんな。いやどうも、貰い物ばっかりで悪いねえ。――この年になると、盆暮れの贈答品で、旧い付き合いの人を思い出してばかりでネエ。懐かしくなって、使ってしまう気になれないもんだからネ、家中、貰い物だ

らけになっちゃうんだ」

馬朝「ヘイ、ご隠居さんは昔から近所の皆さんに親切でしたから――隠居されても、こうして慕われていらっしゃる。ご人徳でございますよ」

隠居「オイオイ、馬朝さんも大分ヨイショが上手くなったね。いや、結構なことさ、噺家はそうでなくちゃいけネエや。今の時代、芸だけじゃ食っていけネエよ。早く真打になって、おカミさんを安心させなくちゃ、ネ、頑張んなよ」

馬朝「ヘイ、有難うございます。（好い人だなあ、ウン、大事にしよっと）早速ですが、稽古を始めさせて頂きたいんですが。ところで、ご隠居さんは何の噺を覚えたいんです？」

隠居「アア、いまさら恥ずかしいがナ……ずっと昔に、番頭さんに寄席に連れて行かれてナァ、呉服屋に奉公して五、六年目くらいのことだよ。何しろお店のことしか知らない田舎者だし、寄席なんて遊び場所に入る事もなかったから、落語や講談もその時、初めて聞いたんだがナ。やたらと芸人さんが

出てくるんで、最初は 食らったナァ、そのとき最後の出てきた噺家が『紺屋高尾』と言うのを出して、――もちろん後で番頭さんに聞いて分かったんだけどね。なんか身に摘まされるようでネエ。それ以来この噺が好きになってさ。……何かの寄り合いの余興にでもやって見たいと思ってね。ああいう人情は忘れたくネエもんナァ。なに、上手くならなくたっていいんだよ、形だけ出来ればネ、形だけネ。よく居るけど、素人が変に上手ぶって喋るくらい、聞いていて嫌味なものはないからネエ。――マァ、そのうちにね、近所の人や奉公人を集めてネ、広間でじっくり語れれば、それだけで上等というものさ」

馬朝「ハァ、そうですか……やっぱり『寝床』に行かなきゃ 目ですかネエ」

隠居「オイオイ師匠、幾ら親しいたって、寝床で稽古はねえだろう。ちゃんと、本格的な噺家らしい稽古を頼むよ」

馬朝「ハァ、どうも相すみません。――それじゃ、私が最初に演じますので、口移しで少しずつ覚えていただきましょう」

隠居「ン、何だい、朝っぱらから嫌らしいね。口移しなんぞ、婆さんとも、もう何十年もしていないがね。いきなり師匠とするんかい。――見てごらんよ、婆さん、赤くなって奥に引っ込んじまったよ」

馬朝「こりゃ、まいったネエ。ここで一ン日、掛かっちまうよ……」

隠居「なんだい、何か言ったかい？」

馬朝「いえ、口移しといっても、変なことするわけじゃないんで――私が喋ったとおりに、ご隠居さんも真似て貰いたいんで」

隠居「なんだい、そうならそうと判り易く言っておくれよ。オイオイ、婆さん、布団は敷かなくていいんだよっ！　見なよ、師匠が寝床だの、口移しだのと言うから、婆さん勘違いしちゃったじゃないか。婆さん、落語なんか聞いた事ないんだからネ。本当に、今更この年で夫婦の揉め事は、ごめんこうむるよ」

馬朝「どうも、相すみません。それじゃ、ハナのところから始めましょうか。ようござんすか、よく聞いて下さいよ――神田紺屋町という染物屋さんが軒を並べておりますところに、職人を十五、六人も使っている、吉兵衛という

江戸っ子の親方が店を持っております――ここまで、どうです？」
隠居「神田紺屋町という――これ今も在るのかい、どの辺だろうね？　おい婆さんや、神田に染物屋が集まっている紺屋町てえのが在ったかい？　――なに、神田駅のすぐ東側がそうかい。けど、あそこじゃ染物屋さんなんか、見かけないネエ」
馬朝「ヘイ、この噺はだいぶ以前のことで、何しろ吉原に高尾大夫が居た頃なんで、まあ、今とはだいぶ変わっております」
隠居「へー、高尾大夫ネエ。ところで師匠は染物屋とか高尾太夫とかを、知っているのかい？」
馬朝「（こりゃ何だか、今日中に終わりそうにないよ、あと四軒も残っているだけどナァ）……いえ、私はご覧のとおりの若輩ですから存じません。ハイ」
隠居「そりゃいけないね。細いことも知っていなきゃ、噺に深い味が出ないよ。だいたい、最近の若い人は、すぐ手軽にやってしまおう、と考えるからね。目だよ、そんな了見じゃ。名人と言われる人たちはネエ、客が気付かないよ

うな、細かいところにも気を配って、血の滲むような努力を重ねてきたんだからね。――さあ、そこに座ってごらん。私も小僧の頃には商売柄、藍染屋さんに出入りしていたから、染め方をじっくり教えてやるから」

馬朝「(弱ったなあ、こりゃ、二、三日は居続けになっちまうよ。どうも、ご隠居は真目すぎるんだね)……いえ、ちゃんと座ってはいるんですが、それはそのう、又の機会にゆっくり教えて貰います。エー、先に進みたいんですが、宜しゅうございますか?」

隠居「そうかい、折角わしが、苦労して身につけた知識を披露したかったのにナア。師匠、遠慮しなくても良いんだよ。じゃ、今度わしの方から出掛けて、一日がかりで教えてやるからね」

馬朝「ヘイ、どうも有難うございます。そいじゃ〈紺屋高尾〉に戻りまして――染物屋の職人の久蔵が寝込んでしまい、親方が医者に診せますと、これが恋煩いと判る――『はい、先日のことですが、あたしの先輩が、お前はもう二十六にもなるのに、堅いばかりで吉原も知らない。そんなんじゃ付き合い

づらいから、一度おれが連れて行こう、と言い出しまして、いえ、私はそんな所で病気を貰うのも嫌ですから、断ったんですが、花魁道中だけならいいだろうと、無理やり連れて行かれまして……』

『フーン、それでどうしたんだい』

『ヘイ、初めて花魁というのを見ましたが、本当にまあ綺麗なもんですネエ。まるで錦絵のようだと、聞いていたんですが、とんでもネエ、本物が数段上等でして……その時の花魁が高尾太夫だったわけです』

『おいおい、何だか芝居の〈籠釣瓶〉で見たような話だナ、そういや、お前は顔中アバタだらけで、何だか次郎左衛門に似てるネエ。どうも、あんましおんな妓にもてる顔じゃないなあ。――それで、惚れた相手は高尾太夫かい、どうもエライ人に惚れたねえ』

『先輩にも、あれは大名道具で、お前なんかは会うことも出来ネエ、と言われたんですが……。会えネエとなったら余計想いが募りまして、飯も食えなくなって寝てばかりで……もう死んでしまいたい！』

『ふーん、そういう事情だったのかい。お前さんは、これまで仕事一本だったからなあ。だがなぁ久さん、大名道具でも会えねえことはないよ。馴染みが付いていきゃ、ちゃんと上がれるよ。ただ、金が掛かるなあ。初回に十両は要るだろうなあ』『エッ、そ、そんなに高いもんですか。……あっし達は月一分の給金ですからネェ。そりゃ無理だ、やっぱり死んじゃおっと!』

『オイオイ、久さん待ちなよ、待ちな。医者の前で死、なんて言うもんじゃないよ。判った、こうしようじゃないか。お前さん、死んだつもりで三年我慢しな。給金が一年で十二分、で三両になる。三年で九両だ。何、足りない分は私が足してやろうじゃないか、どうだい三年も我慢できるかい』

『我慢します、なんでも我慢します。花魁に会えるんなら三十年でも、五十年でも我慢します』

『おい、そんなに我慢したら、花魁は皺くちゃ婆さんになっちまうよ』

――ご隠居、どうです、ここまでやって貰えますか……アレ、ご隠居、泣い

ているんですか？」

隠居「ウッウッウッ、……ああ、昔を思い出してねえ。若い頃に、私も似たような事があったんだよ。ウン、懐かしいネェ。奉公先では朝早くから、掃除やら売り物の準備やらで飯食う暇も無かったし、昼間は旦那のお供で仕入れやら客廻りで歩きし、夜は品物の整理で遅くまで働かされてねえ。外で遊ぶ事なんか、二十代半ばまで全くなくてね。初めて女と遊んだのが、先輩に連れられていった吉原でねえ――オイオイ、婆さんそんなに睨むんじゃないよ。もう昔の事じゃないか、今はそんな事してネェんだから……師匠、あんたも罪だねえ、あの頃はみんなそうだったんだ、とちゃんと説明してくれよ」

馬朝「エエー、ご隠居、仲がお宜しくて結構なんですが……少うし、先を急いじゃ貰えませんか――」

隠居「なんだい、師匠、そんなに急がなくてもいいじゃネエか。落語という

ものはだネ、ただ 白可笑しいことを、喋れば良いってもんじゃねェンだよ。噺の中身をだよ、根っこをちゃんと理解してだね、深うく掘り下げて演じなきゃいけネエ。エエッ、そこにちゃんと座ってごらん、何だか背筋が曲がっているよ、エッ。これから私の人生経験を して、〈深い人間の業〉というものを講釈してあげるから、ネッ」

馬朝「ヘイ、ちゃんと座っているんですが、そのー、後が詰まっていますんで、〈人間の業〉とかの話は、又にして貰えませんか？」

隠居「そういう訳にはいかないネエ、エッ、そうだろう？ 師匠と私で、この話の根本のところを了見違いしていたら、稽古にならねぇじゃないか、ねえ、違うかい。屁理屈じゃないよ、〈人間の業〉の理解だよ、ナ、判るだろう」

馬朝「（こりゃいけネエや。〈ニンゲンノゴウ〉と来た日にゃ逃げ出すしかナイよ。下手な噺家の能書きじゃないんだから）――アッ、ご隠居、急に腹が痛くなったんで、どうも今日は失礼します。ヘイ、さよーなら！」

隠居「オイオイ、待ちなよ。何だ、何だよ、師匠も気が短いネエ、走って出ていっ

ちまったよ。アアッ、私の一番良い草履を、間違えて履いて行っちまったよ、忙しい人だネエ、ンとに」

馬朝「どうも驚いたネエ、ご隠居は根が真目すぎるんだよ。善い人なんだがなあ、どうも、説教好きがキズだよな。噺は修身の教科書じゃネエンだから……エーと、次は町医者の渡辺さんだな。あそこは子供が落語を習いたい、とか言っていたな。マァ、子供なら説教する気遣いもないから安心だよ。――エー、コンチハ、何方かいらっしゃいませんか？」

医者「はいはい、遠慮しないで、お上がんなさい。すぐ診察するからね。――風邪かな、それともお腹ですかな。ウン、熱はなさそうだなぁ、何処が痛みますか？」

馬朝「いえいえ、病人じゃないんで……隣町に住んでる噺家なんですがネエ。お坊ちゃんの稽古に伺ったんで、へえ」

医者「ああ、アンタが噺家さんかい。ウン、聞いてるよ。奥へ行ってごらん、

子供とカミさんが待っているから。わしゃ、患者の相手で忙しくて、どうも手が放せんのでナ」

馬朝「ヘイ、どうも有り難うございます。じゃあ、奥へ さして貰います、ハイ。（どうも親子で待ち受けているらしいが、接試験でもする気じゃないだろうな。何だか、心配だナァ）……マァ元気だして行こう。この部屋かな、コンチワァー」

母親「ハイ、どうぞ、お入り下さいませ。何ですゥ、いやに大きな声ですネェ。子供が怯えていますよ！ タァちゃん、大丈夫よぉ、顔ほど怖い人じゃないのよ。パアー、パアー喋るけど、落語を教えてくれる、お笑いの師匠さんですからね」

太吉「ウン、ぼく、今度の学芸会に出るから、落語の勉強、一生懸命に頑張るんだ。お母さまに立派な芸を見せるからネ」

母親「マァ、この子はなんて良い子なんでしょうね。アナタァ、ちゃんと聞きましたかァ、親のために頑張るなんて、嬉しい事を言うじゃありませんか。

師匠！ちゃんと教えないと、私が許しませんよ！」
馬朝「ヘイヘイ、私の知っている限りはお教えいたします。後は本人次第ですが……。
母親「なんですッ、本人次第とはナンですか！私どもは高い金を払って、アータを呼んでいるんですよッ。あの子はね、人一倍頭も好いんですから。上手くならなかったら、師匠のせいですッ。お金返して貰いますからネッ」
馬朝「（とんでもない家に来ちまったナァ）ハイ、こちらも一生懸命頑張ります。なにが何でも、しっかり覚えて貰います」
母親「それじゃ、私は奥にいますよ。タァちゃん、後でお茶でも用意しますからね。アータァ、息子のお稽古、しっかり頼みますよ」
どうやら今も昔も、わが子に対する愛情と期待は、たいして変わらないようで御ざいます。しかし、何でもそうですが、可愛がり過ぎというのは、色々周りは迷惑するもので御座います。
太吉「へへエー、うちの母ちゃん怖いだろ。でも、オイラの言う事なら何で

も聞くんだぞ。小父さんもオイラを大事にして、言うりにした方が好いよ。お金が欲しいんだろ？」

馬朝「何というガキだろうネ……落語の稽古の前に躾を教えようかい！！」

太吉「お母―さん！小父さんがッ、ウグッウグッ――」

馬朝「分かった、分かった、何でも言う事聞くよッ、聞くよッ！本当にい。怒鳴るないッ」

太吉「へへー、どうやら、自分の立場が分かったらしいネ。親には子供が一番大事なんだから、ネッ。――さあ、早く稽古に入ってよぉ」

馬朝「（このー、くそガキめッ）――いえいえ、お坊ちゃん、こちらの事で……ところで、どんな噺をお望みですゥー」

太吉「小父さん、言葉に、気ィー付けてね。エーとね、小父さんは『金明竹』て言う噺は出来るの？――あの、パァパァー言う処、ちゃんと覚えて学校で威張りたいもん」

馬朝「そりゃ噺家だから、その程度の落語はみんな出来るよ。――ところで、

そのー、小父さん言うのは辞めてくれよ、一応、師匠とか呼んで貰いたいんだけど――いえいえ、お坊ちゃんが、呼びたくないなら結構です。小父さんで我慢しますッ」

太吉「へエー、小父さんも、一応プライドは持ってるんだ。ウン、良いよ、お母さんの前ではちゃんと『師匠』って呼んでやるよ。それより、早くやってよ、パアパアーのところ」

馬朝「（この生意気なガキめッ）いえ、こちらのことで、ヘイヘイ、すぐ遣りますね。――エーと、上方弁だからゆっくり喋りますネ『私ナア、中橋の加賀屋から参じましたん。先度、仲買の矢市が取り次ぎました、（少し早口になる）道具七品のうち、祐乗、光乗、宗乗の三作の三所紋、ならびに備前長船則光、四分一ごしらえや横谷宗民小柄付き脇差、柄前はなァ、旦那はんが古鉄が刀や木と言やはったけど、やっぱりありゃ埋れ木じゃそうに、木ぃが違うておりまっさかいナ、念のため、ちょっと注意申します。（段々早口になる）次は、のんこの茶碗、黄檗山金明竹、寸胴の花活、〈古池や蛙とび

こむ水の音〉これは風羅坊正筆の掛け物で、沢庵・木庵・隠元禅師張交ぜの小屏風』――坊ちゃん、どうしました。どこか可笑しかったですか？　エッ、もう一遍遣れってんですか。そりゃ、何べんでも遣りますが、坊ちゃんも笑っていないで、少しづつ覚えてくださいよォ――じゃ今度もゆっくり喋りますから、良うく覚えるんですよ――『私ナァ、中橋の加賀屋から参じましたん。先度、仲買の矢市が取り次ぎました、道具七品のうち、祐乗、光乗、宗乗の三作の三所紋、

（段々と早口になる）ならびに備前長船則光、四分一ごしらえ横谷宗民小柄付き脇差、柄前はなァ、旦那はんが古鉄が刀や木と言やはったけど、やっぱりありゃ埋木じゃそうに、木いが違うておりまっさかいナ、念のため、ちょっと注意申します』――坊ちゃん、どうです、ここまで覚えましょうか」

太吉「へへー、小父さんはゆっくり喋ると言いながら、途中から早口になって、何時もの高座と同じじゃないか。これじゃ、なに喋っているか、ちっとも分からないよォ。教え方に工夫してくれないかなあ。ハイ、もう一回やってよ」

馬朝「ふーぅ、疲れるガキだなァ……じゃあ、もう一回だけ遣りますからネエ、少しずつでも、覚えてくださいよ――

『私ナァ、中橋の加賀屋から参じましたん。先度、仲買の矢市が取り次ぎました、道具七品のうち（そうか、ここをゆっくりだナ）祐乗、光乗、宗乗の三作の三所紋、ならびに備前長船則光、四分一ごしらえ横谷宗民小柄付き脇差』――どうです、今度は分かったでしょう？　エッ、何ですか、途中で切ると 白くない、最後まで遣れってんですか。坊ちゃん、それじゃ長くて覚え切れないでしょう？　へい、そりゃ遣れってんなら……じゃ、もう一回だけ遣ります――『私ナァ、中橋の加賀屋から参じましたん。先度、仲買の矢市が取り次ぎましたァ……』――坊ちゃん、まだ覚えませんかァ？」……

「エッ、もう一回遣るんですかァ、とホホホホ……もう十五回目ですよ、もうとても出来ません、……ハイ、喉が枯れてきて、声が出ません……クックックッ」

太吉「アレー、小父さん、泣いてらあ。意気地ないなあ、このくらい辛抱し

なくちゃ、お金貰えないよォ。ねえ、また明日、勉強して出直しなよ」
馬朝「なに言ってやがんでィ、バカ小僧めッ。子供は、子供らしい遊びでも、しやがれってんだ。ええい、もう二度と来るもんか！」
医者「オイオイ、師匠じゃないか。なに慌てて帰るんだい、太吉の稽古は上手く言ったのかい？……目が赤いが、アッ、そうか、涙がこぼれるような、いい〈人情噺〉を教えてくれたんだネ、どうも有り難うよ。どうもこの頃の子供は、情が分からなくてネ。本当に、子供の教育には落語が一番だよ」
馬朝「ヘイ、今度は〈寺子屋〉の、打ち首の場 でも稽古しますから、サイナラー」
医者「オイオイ、それは芝居で、落語の噺じゃないだろう……アレー、駆け出して行っちまったよ、ナンだろうね、師匠も忙しい人だネエ……」

馬朝「ふーう、酷い目にあったなァ、もう子供はこりごりだよ。医者のくせに、子供の性根も分からないのかネエ、もう病気になってやらねえや……エーと次は土建屋のところだな。あの社長は気風の良い人だから、細かい事は言

わないだろう。今度こそ上手くいくな――ァ、ここだな、田中土建と頑丈な金看板がある。名は体を現す、と言うが、本当にそのまんまだネェ。へい、どうもォ、こんちわァ」

社長「オイ誰じゃ、物売りなら裏に廻んなよ。表から来るんじゃネェや。（フウーイ）いい気持ちで呑んでるのに……」

馬朝「イエ、物売りじゃないんで、あのーぅ、田中社長さんはいらっしゃいませんか？」

社長「エー、社長はワシじゃが、アッ、そうか、仕事を探しに来たんじゃな。……（フウイー）こりゃ言い酒だねェ、ヨッちゃん、昔から酒にうるさいから、良いのを土産に持って来た……オイ、それにしちゃ、だいぶ華奢な体付きじゃが、どっかで働いたことあるのか？」

馬朝「いえいえ、とんでもない。私ァ、土方仕事に来たんじゃないんで、そのォ、噺の稽古に来さして貰いました、へイ」

社長「なんじゃい、噺家さんかい。じゃァ、こっちにきて一杯遣りナヨ。そ

れにしても、芸人にしちゃナリが地味だナァ。もっと、パーッとした派手な絵柄の着物は、持っとらんのかい。……オイ、遠慮いらねえから、グウーッと空けろィ。うん、ナンなら、同業者の忘年会で俺が着てった、富士山と虎の絵が入った錦を上げようか？」

馬朝「イエ、とんでもない、どうも、ご親切有難うございます。（そんなの着たら、仲間に爪弾きになっちゃうよ）……でも、私ァ浪曲師じゃありませんから、そんな派手なものは着れませんので、ハイ」

社長「そうかい、（フウーッ）もう一杯だけ呑もうと。ナンだね、芸人も色々だねえ。目立って良さそうじゃがなあ。……ところでワシも忙しいから、呑みながら稽古して貰えるかい。師匠も少し呑みな（ウイー）」

馬朝「イエイエ、私はもう結構でございます。ところで、どんな噺を稽古するんでしょうか？」

社長「あのな、この頃は、同業者の寄り合いが増えてナ、（グイッー）業界が景気良いんだ、ウン。時には泊りがけの宴会もあるんじゃが、ワシャ何時

も無芸大食の組で、どうも極まりが悪いんじゃよ。それでな、何かこう、色っぽい小噺でも覚えたら良いんじゃないか、と思ってな――（フウー）どうだろうネ、すぐパッと覚えられる噺、あるかい？」

馬朝「ヘイ、私たちの間では〈バレ噺〉と、呼んでいる艶笑落語が幾つもあります。高座にはあまり掛けないんですが、素人さんが遣る分には構わんでしょう。それをお教えしましょうか」

社長「ウン、できるだけニヤッとするものをな。何しろ、ワシの仲間はガサツな連中ばかりだから、ワシの品格の良さを思い知らせてやるから（ウイーッ）」

馬朝「（バレ噺に、品格はないんだけどなァ）イエ、こちらのことで……ハイ、それじゃ、幾つか、まず私が遣ってみます。

――どうにも酒癖の悪い男が、女房に絡んでいます。

『オイ、カカァ、もう一本付けろーぃ』

『おまえサン、もうッ、お酒なんかないんだよォ』

『なに言ってやがるゥ。なかったら、買ってこーぃ』
『もう、買うお金もないんだよッ』
『なにィ、なけりゃ、何でも売っ払えば良いじゃねえかァ。そのくれえの才覚は、女房ならするもんだァ。行ってこーィ』
言い出したら、聞かない亭主ですから、カミさんは黙って出て行き、暫らくして一升持って帰ってきました。
『ハイ、買って来たよ』
『見ろゥ、金は有るじゃないかァ、騙しやがったな！コンチクショウ』
『もう、売るもんは本当にないんだから、これを呑んだら明日から、一生懸命働いておくれ』と言って、頭の被り物をとると、坊主頭が出てきます。これには亭主もびっくりして
『お、お光、それじゃ……』
『ああァ、売るものがないから、髪の毛を売って一升買ったんだよ』
『ううう……俺が悪かった。……勘弁してくれ』

さすがの亭主も、酔いも醒めてしまい、詫びを言います。これで二人はすっかり仲良くなり、同じ布団にもぐり込みまして、何時ものように、亭主がカミさんの前のほうに手を伸ばします、と

『おお、オイッ、お光！』

『なんだァい、おまえさぅん』

『ここにな、あと一合、残っている！』

――ええ、これは〈あと一合〉と言う噺ですが、どうです、これなら覚えられるでしょう」

社長「こらっ、寅吉、そこでニヤニヤしてんじゃねえ。さっさと現場に行きやがれ、（ウイーッ）ントウに。オイ、アケミちゃん、赤くなってないで、師匠にツマミくらい出しなよ。ナンだァい、最近は、色気づきやがって……（フウー）いい気分だい、イエね、うちの社員が、後ろに並んで笑ってやがる。師匠が上手すぎるんだよ、ナァ。ところで、この噺は 目なんだよ。と、言うのはね、ヨッちゃん、知っているだろう、吉野建設の社長、なに、知らない？

ん、（フウー）ワシの幼友達だよ、本当に知らないかい。（ウーィ）いい奴でねえ、ワシんとこの仕事がないときなんか、無理して、仕事を廻してくれてネェ、ウン、ワシの命なんか、欲しいと言われりゃ、何時でも差し上げちゃう、と言う仲さ。（ウーィ）このヨッちゃんのカミさんがネェ、実は毛がなくてね、そうさ、あそこの毛がさ。それに、ヨッちゃんも大酒呑みだしネ。だから、この噺はまずいよ、ネ、ちょっと出来ねえだろう。（フウーィ）他にないのかい？」

馬朝「そうですか、それじゃ、他の、もう一つ遣ってみましょう。――長い間、旅に出ていた亭主が帰ってみますと、出掛ける時はペッチャンコだった女房のお腹がだいぶ膨らんでいる。マァ、今で言う、浮気、不倫って奴ですから、亭主は怒りますな。

『やい、やい、相手の男はだれなんだ、チキショウ！』

『嫌だねエ、変なこと言うのは、止しとくれよ。隣近所にキマリが悪いじゃないか。あたしゃネ、お前さんの留守中、明神様に日参して〈どうか、子供

が授かりますように〉って、お願いしていたんだよォ。だから、お腹のこれは、明神様の子なんだよ』

――てんで、シャーシャーとしています。間男の名前なんざ、白状するものじゃありません。そこで亭主は、知恵者の大家に相談すると、

『ウーン、それじゃな、その子が生まれるとき、胞衣、胎盤をナ、荒神様のお神酒で洗うんだ。そうしたら、胞衣に父親の家紋が現れる。その紋の男が間男に間違いない』

――てんで、知恵を授けてくれます。亭主は喜んで、子供が生まれるのを待ち、お神酒で胞衣を洗うと、やがて、『氏子中』と出た――どうです。これなら、覚え易いでしょう」

社長「ヨオ、色っぽいネエ。いい噺だよ、師匠上手いぞ、自分の経験じゃネエのか（うふふふーィ）……だがなあ、ヨッちゃんがナ、心配だな……師匠、ヨッちゃん、知っているだろう？ 吉野建設の社長の、俺の幼友達ィ……ン」

馬朝「ヘエ、お酒が好きで、不景気のとき、仕事も廻してくれる人でしょう、

存じております」
社長「なんだあ、ヨッちゃんと、知り合いだったのかい……師匠も水臭いネエ、先にそう言えば良いのに、マァ、一杯いこう。アレッ、一升空いちゃったネ、もう一本出すぞォ。ヨッちゃんの知り合いは、ワシも友達だろう？ネッ、ぐーッと呑もうよ」
馬朝「イエ、お酒は、も、もう、十分です、（ウィッ）結構な酒ですナァ……ところで、この噺、吉野社長にはまずいんですかァ」
社長「ヨッちゃんは、仕事柄、家を留守にする事が多いんだよ。（ウィーッ）遠くの現場になると、十日も二十日も泊り込みになる事が、度々あるからなァ。うん、それで師匠も知っているり、カミさんが美人で色っぽいだろう。（ウィッ）ヨッちゃん、それで気が気じゃねえんだよ。ワシだって、時にはムラッ、と来るから、ネ――この噺、ワシが遣るのは、やっぱりまずいだろう、ネ、兄弟ィ……他になんかないのかい？」
馬朝「（フウーッ）なんだか知らねえが、もう、兄弟になってるヨォ、しかし、

いい酒だネエ……それじゃ、もう一つ遣りますが、これが最後ですよ。（目が廻ってきたナ、フー）――――エーと、人里離れた山奥に、母親と娘三人の女だけで暮らしているうち家がありまして（フウー）……。こんな山奥にも、迷い込んでくる旅人がございます。

『済みませんが、道に迷い難儀しております。どうか、一晩だけ留めて貰えませんか？』

『はー、それは大変だったべエ。こげなあばら家で、よがったらば、入んさい』

久しぶりに見る男に、娘たちは大喜びで（もう一杯、貰おうかな、グイッ）――やれ、晩飯の支度だ、それより、風呂の準備だ、と騒いでおります。――旅の男が風呂に入っていると、娘たちが覗きに来ます。

『ふーん、アレが男の体だべか。しかし姉ちゃん、どうも変だべ。尻尾が付いとるだが、山の獣と違うて、前にブラ下がっとるべ……』

『どれどれ、私にも見せろ、ホンに変な尻尾だべ、こんなの初めて見ただ。チョと触らして貰うべ』

『そんなら、私から頼むだ』
てンで、末娘が風呂場に入ってせがみます。男も驚きましたが、親切にされてンですから、断れない。（私も酒が断れない、ウイーッ）
『姉さん、触ってきたべ』
『それで、どんなだったべ』
『うん、細長くて、フニャフニャして、皮だけみたい……』
『なんだか、良く分がらないべな。今度は私がいくべ』と、中の娘が、男に触ってきて
『違う、違う、皮じゃなくて、硬い肉の棒だべ』
『なんだべ、あんたら二人の言う事が、だいぶ違うでネエの』と、今度は一番上の娘が、触ってきまして
『マァ、冗談じゃないだァ。アレは大きな骨だよ！』
――エエー、（フー）こんな噺なんですが、どうですゥー。吉野社長も、今度は大丈夫でしょう」

社長「おッ、なんだ、師匠は、ヨッちゃんを知ってるのかィ。エエー、友達かい？」

馬朝「いえ、友達って訳じゃないんですが（弱っちゃったなァ、ウイー）――社長さんの幼馴染で、情に厚くて、時々仕事も廻してくれる。お酒が好きで、奥さんがまたきれいな人で、時どきムラッと来るほど、色っぽいんでしょう」

社長「なんだァ、師匠はヨッちゃんの親かァ。いやに詳しいじゃないか、アッ、おめえも、カミさんにムラッと来た口だな。悪い奴だなァ、承知しないぞォ」

馬朝「いえ、とんでもない。会った事もありませんよ。（ウイー）……ところでこの噺はどうします」

社長「目だな、遣れねえや」

馬朝「どうしてです？」

社長「子供は三人とも、女なんだよ！」

どうも、エライ目にあったなァ。まだ、酒が残ってるよ。（フーィ）酒飲み

なんかに、噺を教えるのは止そう。でも、いい酒だったなあ……エーと、次は八百屋の源兵衛さんとこだな。源兵衛さんは、堅さ一辺倒で、石屋の小僧も呆れる、と言われるそうだから、酒を呑まされる事はねえな。……しかし、あんな堅物が、芸事なんか習ってどうするんだろうな。なんだか、心配だァ（フウー、足がまだふらつくね）……ああ、着いちゃった。コンチワー」

源兵衛「ヘイ、いらっしゃい！　今日は大根が安うなっておりますよ。ネギも揃ってますよ」

馬朝「いえ、客じゃないんで……噺家なんですが」

源兵衛「カモシカ？　なんだい、うちは肉屋じゃねえよ。間違えるない！」

馬朝「いえ、カモシカじゃないんで……落語の稽古に来たんですが……」

源兵衛「なんだ、芸人さんかァ。裏に廻っておくれ、穀潰しが一匹、徳一郎ってのが、首を長くして待っているから……本当にアイツの客は、碌なの居ねえや」

馬朝「なんだか、凄いこと言ってるな……なんだか、徳一郎って人らしいが、

あまり良く思われてイネえな。コンチワー、どなたか居ますかァ」
徳一郎「ヨオッ、此処に一人、いらっしゃるよォ。朝からズゥーッと、絶えることなく、いらっしゃるンだ」
馬朝「（なんか、変な人が這い出してきたよ。これが一匹なのかな？）……へえ、噺家の馬朝ってんですが、どなたが稽古されるんで？」
徳一郎「どなたが、って言われてもねえ。ここには、アータと私の他は、猫一匹居ませんよ。……ゴキブリはだいぶ居るけど……アータ、ゴキブリに落語教える？」
馬朝「とんでもない、（人間だって苦労してんのに……）イエ、こちらの事で、……ところで、あなたは八百源の若旦那……サンですか？」
徳一郎「いやいや、アタイはここの者じゃないんだ。あのウルサイ、源兵衛の実の甥っ子サンだよ。ナーニ、家を勘当されちまってネ、切羽詰って、ここに転がり込んだ、居候サン、というのが正体さ」
馬朝「それじゃ、噺の稽古代は、どなたが払ってくれるんです？」

徳一郎「だからネ、こういう段取りなんだ。アタイが、年寄りが涙を流すような、いい人情噺を覚えて、親父の前で語る。それでうまく丸め込めれば、ネ、勘当が解けてうちに帰れる……筈なんだ。その時には幾らでも払うよ。ネ、師匠たちにも、出世払い、という事があるだろう？」

馬朝「そりゃ、出世払いにしてくれる、贔屓の人はいますがねえ。……でも、若旦那とは会ったばかりだし、第一、そんな簡単に勘当が解けるわけネエでしょ。それに、親を騙る手助けはどうもねえ、……気が進みません。ハイ、帰らせて貰います」

徳一郎「オイオイ、そんな冷てえこと言うなよ。ネ、師匠だって、金のない辛さは身に染みているんだろう。それに、実はここにも長くは居られないんだよ。……店に入ってくる時、叔父さんの刺すような冷てえ言葉と、ゴミ扱いの目付き、エッ、この暑い日に、冷てエもの感じなかったかい？」

馬朝「ええ、甥っ子なんぞは可愛いいものですが、……叔父さんと、何かあったんですか？」

徳一郎「特に何をしたって覚えはないんだがネ……転げ込んできた翌朝、十時過ぎに起きて、朝ご飯に酒肴も付けてくれ、って言った時から、叔父さんと叔母さんが、なんだか急に、機嫌が悪くなったんだ。マァ、年寄りは気が短いからな、気にしてもしょうがネェや」

馬朝「ちょっと、アータァ、若旦那ッ、そりゃ居候が言う事じゃないよ。そりゃ誰でも怒るよ。（……えらいのに、見込まれちゃったなあ）それで、昼間は八百屋の手伝いなんぞ、少しはしているんですか」

徳一郎「アタイ、そんな事たあ、しないよォ。アタイの家は呉服屋だからね、力仕事はまずいんだ。筋骨隆々なんか、いまどき流行らないよ。粋筋の姐さんや若い娘に、――若旦那は本当に着物が似合うし、様子がいいよォ！一緒になりたいわッ！――って、言われて育ったからね。……花柳街の姐さんたちから、――若旦那が勘当になっても、一生 倒見ますよッ、――って言われてね。ちゃんと、その りになったのに、ウッウッ、付いて廻るのはお天道様だけで、姐さんと米の飯はどっかに行っちゃった。あたしはこんな所で、

毎日毎日、寂しい暮らし……クソッ、あの嘘つき女、ウッ、ウッウッ」
馬朝「若旦那、こんなとこ所で、泣かないで下さいよッ。とんでもない人だなァ、こりゃ、落語を稽古したって、しょうがないネ。だいたい、居候が毎日寝てばかりじゃ、だれでも見放すよネ。あたしは、叔父さんの方に味方したくなったね……」
徳一郎「だからね、アタイも必死で稽古するから、助けておくれよォ、うちに帰りたいよォ、ウッウッウッ」
馬朝「泣くのは止して下さいよォ、分かりましたッ、手伝いますから……（本当に、私が泣きたいよォ）……じゃ、〈唐茄子屋政談〉という噺が、若旦那にそっくりですからネ、これ稽古しましょう。この噺と同じように、改心して働くってのは、どうです。噺を語るだけじゃなく、噺の筋道りに働らけば、どんな厳しい親でも、きっと許してくれますよ」
徳一郎「どんな噺か知らないけど、やっぱし働かなくちゃ、目かねえ。嫌だなァ。でも、隅田川の船頭、なんてのは 目だよ。冬は北風が辛いし、夏の

千日様の時分は、小うるさい二人組みが、必ず乗るからね。もっと楽な仕事を探しておくれ」

馬朝「なに言ってんですよ、唐茄子屋の話ですッ。唐茄子、カボチャを売るんです！天秤棒で担いで売り歩くんですよ。唐茄子を売りながら、若旦那の家の付近を、ぐるぐる廻ってごらんなさいよ。親御さんも、ああ、アイツもこんなに苦労しているのか、ってことで、勘当はきっと解けますよ。ネ、この人情話を覚えて、親御さんに聞かせましょう。さあ、唐茄子を担ぎましょッ」

徳一郎「師匠も、そんな恥ずかしいことを何の躊躇いもなく、よく言うネ。（あれは、本当に辛いんだから）せめて、今度は荷車にしておくれ。頬っ被りして下を向いているから。……ネエ、こんなことが、花街のお姐さん達なんぞに聞こえたら、アータア、もう相手にして貰えない……目？　分かりましたよッ、担ぎますったら、エエ、なんだって担ぎます。なんなら、浅草の観音様だって担ぎますッ」

馬朝「アータ、なんか変なこと言いますネエ、〈今度は〉とか……それに、

観音様は一寸八分しかないでしょ！そんなの子供でも担ぎますよ」
徳一郎「観音様で足りないなら、櫛を、十個でも二十個でも、……アッ、そうだ、小間物屋がいいや、櫛や簪、白粉を花街で売り歩く、ウン、娘っ子も集めてだよ、〈お嬢さんは色が白いから、この櫛がお似合いで……〉なんてのが、あたしにぴったりだァ」
馬朝「唐茄子！　カボチャ！　カボチャが嫌なら、店にある大根でもイモでも担ぐんですッ！」
徳一郎「えーッ、仕方がないなあ、どうしても八百屋やんのォ、（前にもやったんだけど……）しょうがねえなあ、じゃ落語の稽古しておくれよ」
馬朝「（フウー、やっと商売になりそうだよ）……それじゃ、出掛けるところから遣りますからね。よく覚えてくださいよ――婆さん、支度は出来ているかい？　なに、半纏と、わらじと、股引だけしかない。足袋はねえのか？　あるけど、白と黒が片っ方ずつ、それで結構じゃないか、目だって良いわな。ああ、それから、被り傘無いかい、俺が大山参りで使ったのがあるゥ、それ

で良いや、なに破れていても、青っ葉を入れときゃ、涼しくていいや。弁当は出来たかい？　なに、オカズがない、贅沢いらネエよ、沢庵の二切れもあれば十分だい。ァ、そうだ、梅干入れときな、暑いから腐るといけねえや。徳ッ、こっちに来い――イエ、若旦那のことじゃないんです、噺の登場人物ですから、そんなに前に出ないでくださいヨ。同じ名だから、どうも、やり辛いナァ――」

『徳ッ、メシ食ったらこっちに来いッ』

『叔父さん、そ、そんなに唐茄子の山こさえて、どうするんですゥ』

『バカッ！　おまえが売って歩くんだよ』

「――ここまで、覚えましたかァ」

徳一郎「ウッウッ……又ァ、こんなことすんのォ」

馬朝「どうしたんですゥ、泣いているんですか。まだ、噺は始まったばかりですよ……弱ったなあ、先に進めないや」

徳一郎「そうじゃないんだ、この前、ここの叔父さんにそっくりな事、させ

られたんだよ。……でも、噺の叔父さんの方が、ずっと優しくて情があるもん……暑い日だったから、被り傘を頼んだら、お前には、お天道様が当たるだけでもあり難い、そんなもの要らネエッ、って怒られちゃった。」

馬朝「エッ、前に一度やった事があるの？……と言うことは、叔父さんは落語に詳しいの？」

徳一郎「うん、詳しいなんてもんじゃないヨ。あんな堅物で、飲む、打つ、買う、などの立派な遊びは全然しないけど、何の因 か、落語にだけは凝っているんだ。夜中なんぞに、一人でラジオの落語聴いて、ニタニタしているとこなんか、相当に薄気味悪いよ」

馬朝「アータネ、そんな罰当たりなこと、言うもんじゃありませんよ！　叔父さんは、落語の国から落語を布教にきた、落語の使徒だネ。あたしが大臣なら、一等賞の勲章上げて、銅像立てちゃうよ」

徳一郎「そうかね、そんなに立派じゃないと思うよ。師匠の噺では、白黒片っ方ずつの足袋だけど、叔父さんは、それじゃ目立たないからって、ペンキ

で赤と黄色に塗っちゃうし、（ウッ、ウッ）ぼろ半纏の上にタスキを掛けて、本日大安売り、って大書きするんだもん。（ウッ、ウッ）おばさんも調子に乗って、天秤棒の先に、七夕の短冊の残りに、〈祝・初店〉、〈勘当息子〉なんぞと書いて、キンキラキンにして笑っているし……歩いているだけで、周りにゲラゲラ笑われたんだから……あの夫婦は、鬼の国から来た人でなし、だよ」

馬朝「ナに、バカなこと言ってんですか。……そのあと、叔父上様はどうしました」

徳一郎「唐茄子を前と後ろの籠に十六個も担いで、やっとこさ表りに出たと思ったら（グスン、ウッウッ）……叔父さんが後ろから付いてきて、棒で突付きながら、売り声の練習をさせるんだ。へトウナスゥーやトウナスー、唐茄子屋でござーい〉って売り声が、もう耳にこびりついているよ」

馬朝「叔父さんは、細かい教え方するネェ。偉いなあ……」

徳一郎「師匠！なに感心してんだよッ。アタイの稽古はどうなるのッ」

馬朝「いえ、どうも落語より 白い話なんで……で、どうなりました？」

徳一郎「生まれて初めて、天秤棒を担いだってのに、皆が 白がってんだから。師匠も担いでごらんよッ。籠はあっちこっちに揺れるし、肩は腫れ上がるしね。また何の因 か、真夏の晴れ渡った日で、顔が汗だらけになって、傘がずり落ちて前が見えなくなって……クックッ……それなのに、叔父さんは道端から石を拾い上げて、オイラの足の前に転がすんだから……クソッ、あの鬼ッ」

馬朝「 目だよ、叔父上様の悪口言っちゃ。そういう噺なんだからサ。それにしても、細部に拘りがあっていいネエ。いい噺家になれるな。それから、どうしました?」

徳一郎「やだ、やだ、もう遣ってられないよォ。……それから? そりゃ転んじゃいましたよッ。当たり前でしょ、前が見えなくて、フラフラしてんのに、石を転がすんだからねッ。アタイは、転んだまま泣き出しましたよ、本当に悔しかったんだから。あの鬼ッ。……そいでね、ここで待っとけば、人の良い兄さんが来て、唐茄子売ってくれるとか言って、叔父さんはサッサと

帰っちゃった。エエ、三時間も待ちましたが、誰も来ませんッ。来たのはネ、近所の子供たちと野良犬だけですッ」

馬朝「おかしいなァ、町内の若い衆が唐茄子を売ってくれなきゃ、先に進めないんだけど……若旦那どうしますゥ？」

徳一郎「そんなこたァ、知らないよッ。――アタイが倒れたまま泣いているとネ、悪ガキどもが 白がって石ぶつけるし、犬は噛み付くし、お天道さんは容赦なく照りつけて……アタイが死にたくなってネ、カボチャに頭をぶつけていると、お貰いサンが来て、お金恵んでくれた」

馬朝「若旦那ァ、お貰いサンから、お金貰ったらマズイよ。じゃ、一っ個も売れなかったんですか」

徳一郎「売れないよ、あんなとこォ。だって、周りは小学校と幼稚園しかないんだから。だから仕方なく、お貰いサンのお金だけ持って、家イ帰ったんだ」

馬朝「伯父さんたち、喜んで迎えてくれたでしょう？」

徳一郎「そんな爺さん、婆さんじゃないよ。伯父さんは、唐茄子が売れなかっ

たのに怒って、思い切り殴りつけるし、伯母さんはお金を見つけると、これは今までの部屋代だって、取り上げちゃった。甥っ子の居候から、部屋代を取るなんて……まるで落語の因業大家じゃないか」

馬朝「いやァ、立派な伯父様たちだ。私が噺を教わりたい」

エエ、新作の「稽古屋　馬朝」でございました。

中さん治は、ていねいにお辞儀しながら、客席に目を配る。テケテケ、テケテケと、追い出し太鼓が賑やかに鳴り渡る。梅の花が描かれた、派手な緞帳が下りてくる。しかし、客席からは、まだ拍手が続いている。疎らになった客席で、その大半を、われら〈チュウさん応援団〉が受け持っている。

外に出ると、周りは酔客で一杯である。夕方には、客の姿が疎らだった焼鳥屋も、立錐の余地がないくらいに繁盛している。〈古き〉時代を追い続ける寄席とは違い、〈今〉そのものが、活気を帯びて弾けている。時計を見やると、九時を少し廻っている。空を見上げると、まわりの店屋から立ち上る濛々たる煙と、嬌声が夜空に消えていった。

舞ふ花に
夢は山河を
駆け廻る

平成十五年一月一日

辞世の句

溝上雄文

追悼文　信じられない突然のおれ

割烹　今昔女将　野村さち子

「すいません。おビールください」。大阪・江戸堀にある私の小さな店で、溝上さんの夜は、まずこの言葉から始まります。東京から大阪勤務になり、月刊誌「大阪人」に掲載された私の紹介記事を見てお越しいただいて以来、今昔のお客さまでした。

いつもお一人で来られ、扉に近い席に座っておられましたが、すぐ常連の方々と打ち解けられ、楽しそうにお話をされていました。日本の伝統文化である文楽や歌舞伎に造詣が深く、さらに落語や漫才などにも詳しいことから、「今時珍しい博識家」として一目置かれていました。

文楽と言えば、初春公演では文楽人形による振る舞い酒という行事があり、テレビニュースを見ると、一番か二番に必ず溝上さんの笑顔がクローズアップされていました。

《おわりに》

普段はあまり日本酒をたしなまないのに、この時ばかりは、とてもおいしそうでした。

テレビに関しては、もう一つ忘れられないエピソードがあります。私たちはともに、夕陽の素晴らしさに魅せられた人たちの集まりである「夕陽さんさんの会」に所属していますが、数年前の彼岸の中日、溝上さんがカメラを持って大阪四天王寺に撮影に行かれたときのことです。国宝になっている「鳥居」は、西に沈む夕陽を拝む風習が昔からあるといわれるほど有名なところです。

その日、鳥居付近にはＮＨＫの取材班とともに永六輔さんが訪れており、夕陽に礼拝する溝上さんの横顔と後姿が番組のラストシーンになりました。この出会いをきっかけに、溝上さんは永さんに私たちの会の資料などを送り、交流を続けられていたそうです。

夕陽さんさんの会は、夕陽を媒体として、自然との共生を目指す市民レベルのボランティア団体です。その運動の一環として、三万坪に及ぶ大阪住吉大社の境内から落ち葉を集め、堆肥にする活動をしています。この活動はその後、大阪府環境保全補助金の対象になりましたが、申請準備などで数回、溝上さんと二人で府庁を訪ねました。担当者との交渉は行政に じたテキパキとした対応ぶりで、とても頼もしく思いました。

今昔で溝上さんは多くの方々と親しくなられました。そして、お坊さん画家の故那須恵齊先生をはじめ、日本画家の藤森哲朗先生、油絵の鎌田開先生、陶芸家の安田道雄先生（京焼）、市野雅彦先生（立杭焼）、久保田保義先生（鳥ヶ丘窯）の個展には必ず行かれていました。出雲の和紙では、安部信一郎先生の便箋がお気に入りでした。

京都・島原の司太夫をご紹介すると、すぐに意気投合され、太夫たちの会にも毎年参加。四年前から復活した節分のお化け（仮装行列）では、一昨年は東映太秦の撮影所で衣装を借りて「光源氏」になられ、氷雨の中、四条　りと河原町　りへ。このとき、私は「ひょっとこ」に扮し、垂れ下がる下襲の裾を持って練り歩きました。溝上さんは昨年「太桃」という名の舞妓になり、今年は助六の予定でしたが、かないませんでした。

「ねェね、ママ、聞いてくれる」。溝上さんからは、いろいろなことを教えていただきました。「焼酎は生のままがよく、お湯割りやロックにしない方がおいしい」とか「それも度数の高い三十度以上のものがよい」などなど。今昔でも、ビール以外のときは、焼酎を生のままでお飲みになりました。大の読書好きで、何でもよくご存知でした。お仕事は地図屋さんでしたので、都市計画や環境論などについても伺いました。

《おわりに》

溝上さんの遺稿となった「渋谷おでん屋物語」は東京時代の思い出を元にしたもので、言わば私小説です。舞台となった「小花」というお店はもうないそうですが、溝上さんは「いろいろな職業の方がおられ、皆さんから多くのことを教わり、大変いい勉強をしました」と述懐されていました。私の店もそういう意味で、ご贔屓にしていただいたのだとしたら、光栄に思います。

悲報を聞いて、今年一月三十一日、熊本県の新水俣駅近くで行われた告　式に参列しました。心からの感謝を申し上げ、最後のお　れをしたつもりなのですが、あまりに突然のことだけに、まだ信じられない気持ちでいっぱいです。

また、扉を開けて、ひょっこりと現れ、定席に座ってくださるのをお待ちしている私です。いつものように……。合掌。

あとがき

今年明けて早々に、水俣総合病院に入院中の溝上さんから電話が入った。

氏は既に、当社のオーダーメイド出版（読者予約を募って、その結　から出版に踏み切るかどうかを決めるという自費出版システム）から、「悪童たちと先生」「談合受注」という、二冊の本を出されている。

氏とはそのときからの付き合いだ。昨年末、割烹「今昔」の女将野村さんから、氏が末期ガンで入院し、「故郷水俣で死にたい」と水俣の総合病院へ移られたと聞いたばかりだった。

その溝上さんから電話だという。

（なんて声をかけたらいいんだろう……）体がにわかに緊張していくのが分かる。

「だいじょうぶですか」という間の抜けた僕の第一声に、受話器の向こうから、意外と元気そうな声が返ってきた。

《おわりに》

「桐生さん、次の本を出したいんだ」
「……？」
「末期ガンで、死後の献体の手続きも、今、済ませたところなんだ。もう長くないから、僕が死んでから本にしてほしいって思ってネ。原稿のフロッピーを送ったから後は頼むよ。」
「洒落たことしますネ。じゃあ、見舞いがてら一度打ち合わせに行きますよ」と、明るく答えたものの、そういう僕を制して
「全部、そちらでやってほしい。みんな任せたいんだ。僕はもう限界だよ。引き受けてくれよ……」と、さっさと言うことだけ言って電話を切ってしまわれた。

翌日、「熊本県水俣市天神町一丁目二番地一号　西四病棟四六一号内　溝上文雄」さん差し出しの宅急便が届いた。
早速、開けてみた。
氏が東京在住中によく通ったおでんやさんに集まってくる人たちのことを書いたもの

だ。元気な頃に書き出したものを、病床で仕上げようとしたものだろう。
「其の一」「其の二」「其の三」と書き進め、「其の三」まで来て力尽きたという感じだ。
そんな中にこんな文章があった。

やや西に傾き始めた太陽が、高く蒼く晴れ上がった空の向こうから、夏を惜しむように精一杯の輝きと熱気を伝えてくる。私たちは吹き出る汗をハンカチで拭きながら、ぼんやりと晴海 りを行き交う車と、人の流れを眺めていた。時の流れが少しずつ遅くなっていくような気になる。
「いつの間にか秋になったのねえ……何だか今年も、あと少しでお正月が来てしまうわ。一年が、あっという間に終わるような歳になってしまった」
「もうお互いに若くないからね。……何時までものんびりしていられない、もう残りが少なくなったんだよ」
「そうね、もう若い時みたいな、煌くような楽しい時はないのよね……街路樹の葉っぱが一枚ずつ散って行くように、人生も少しずつ終わるのね。……きっとそうなん

《おわりに》

だわ、悲しいけど……」

「そうだよ、昔から人生五十年と言うしね。もう俺たちの活躍できる表舞台は、二度と来ないのかも知れないね」

「でも悲しいわね。このまま歳を取っていくだけなんて」

「悲しいさ。でも、所詮人の一生なんて〈下天の内を比ぶれば　夢幻の如くなり〉でしかないのさ。まあ、死　のはまだ多少先だろうから、生きていることを精一杯に楽しむしかないね」と、私は直実になったつもりで慰める。安っぽく扱われた敦盛が、何だか墓の中で怒っている気がする。

人間はどう頑張っても、誰でも死　ことは避けられないし、逃げ廻ることにも限度がある。それなら、死を恐れることも無益だし、死を軽んじることも勿体ない。

氏は、この文章を書いたとき、自分が「ガン宣告」を受け、死と真向かいにならざるを得なくなることを予想していたのだろうか。

溝上氏とはあまり深い付き合いではなかったが、氏とは肝心なところで思考が妙に絡

み合っている気がする。実は氏から出版の電話を頂いたとき、私自身も、このことで思い悩んでいた。実際に自分がガン宣告を受けたわけではないが、自分の周りで、身近な人が死を迎えていくのを次々に聞かされ、「死」って一体なんだろう。「死」とはどういうことなんだろうとよく考えるようになった。

幼い頃はよく死ということを考えた。死んだらどうなるんだろう。死んだらどこへ行くんだろう。死　とき痛いのかなあ。痛いのはいやだなあ。そんなことを取り留めもなく考え、結論がでないままに、考えることをやめようとした。

考えるのをやめても、突然わき上がってくる想い。寝るとき、明日、目がちゃんと醒めるのかって思い出すと、怖くて眠れないこともよくあった。

それが長じるに従って、死は遠いものになっていった。実際にはどんどん死が近づいてきているというのに、なぜか自分は死なない、自分には死は縁遠いものと思うようになっていって、死は逆に遠いものになってしまった。

それがあるとき、死に向かって歩いているという現実に気付かされる。

氏の言うように「逃げ廻ることにも限度がある。それなら、死を恐れることも無益だし、死を軽んじることも勿体ない」。まさにその通りだと思う。

《おわりに》

思い悩むぐらいなら、自分で自分に「ガン宣告」しようと思った。
自分の命は六十まで。現在、五十七歳だから、あと三年の命だ。
そう勝手に決めてしまった。そう決めてしまったら、おちおち仕事なんかしている場合ではなくなった。女房と二人、食うぐらいならなんとかなる。あと三年で自分の人生に答えを出したい。人の世話をするより、自分の世話をしよう。今まで生きてきた中で出してきた暗い想いを見つめ直し、自分をもとある姿に修正したい。
そう思って、会社側に今年いっぱいで仕事を辞めたいと宣言したところだった。
そこへ溝上さんから電話を頂き、この原稿を受け取ることとなったのだ。
しかし「渋谷おでんや物語」自体は完結しないまま終わっている。文の最後、私達は寄席の追い出し太鼓に追われるようにして「渋谷おでんや物語」の世界から追い出される。
テケテケ、テケテケと、追い出し太鼓が賑やかに鳴り渡るが、寄席を出た私達はいったいどこへ帰ればいいのだろう。
本の完成を見ることなく、溝上さんも逝ってしまった。

◇

最後の打ち合わせにと、溝上さんのお姉さんと妹さんを熊本に訪ねた。

お姉さんは、溝上さんが子供時代遊んだ場所に連れていってくれた。

「ここが『悪童たちと先生』に書かれていた山神さんの場所」「ここが小学校の跡」「川で遊んだというのはここだと思うんだけど」……

『悪童たちと先生』の背景になった場所を一回りして、溝上さんが暮らした家へと帰ってくる。今は誰も住んでおらず、お姉さんが時々風を しにくるだけだという。

やがて、妹さんが職場である病院を抜け出し、駆けつけてくれた。話は、いきおい溝上さんの最後の模様となった。

「なぜ自分が……」。恨み言が怒りとなり、最初の頃は随分荒れたという。怒りは痛みとなって襲ってくる。激しい痛みとの格闘のなかで、やがて病を受け入れる方向へ動いていったようだ。これに伴い怒りが周りの人への感謝へと変わっていった。周りの人に「あ

《おわりに》

りがとう」という優しい思いが自分をも包み込み、痛みが和らぐ方向へと変わっていった。

死ぬときは、お姉さんに、妹さんに、周りの人みんなに感謝しながら逝ったという。

お二人の話を聞きながら思った。溝上さんは、『渋谷おでんや物語』は未完結ではあったが、自分の人生はきっちり完結させていかれたようだと……。

僕もいざ死　とき、みんなに、自分に、すべてに心から「ありがとう」と言って終われるだろうか。

別れ際、お姉さんが声をかけてくれた。

「この家は空いたままだから、自分の故郷だと思っていつだって帰ってきていいんだよ。ジプシーのような転居生活を繰り返す者にとって、「故郷はこっちだよ、早く帰っておいで」って言われたようで、本当に胸に染みわたる一言だった。

（編者　記）

渋谷おでんや物語

紙版　初版発行　2005 年 4 月 15 日
デジタル版発行　2021 年 5月 20 日

著者 —— 溝上雄文
発行 —— 溝上雄文
製作 —— 桐生敏明（株式会社シルクふぁみりぃ）
電話……0745-60-2696 ／ FAX……0745-60-3098

© YUBUN MIZOGAMI　Printed in Japan 2005 / digitalization 2011